



求道

第 六 卷  
第 拾 號

求道第六卷第拾號目次

求道

◎罪と惠

自督

◎知恩報德

◎聖人追慕

講話

◎如來は無上法皇なり

近角常觀

聖傳

◎ヂヤータカ釋尊傳

第卅五 出し抜かれし酷き鶴

告白

◎故菅瀨夫人の日記

◎佛教辭典

紹介

時報

◎山形行◎求道學舎報恩講◎東京諸會合

每日曜午前九

求道學舎

(本郷森川町一帯地)

毎土曜午后二時

第一 求道會

(九段坂佛教俱樂部)

毎月二日午後七時

第三 求道會

(日本橋綱敷町説教所)

求道

第六卷 第十號

罪と惠

我等が罪は深くして、之を滅すの望絶えはてたり、之を滅すはあるか、其兎の毛、羊の毛の先にある塵ばかりも之を避くるあたはざる也、如來の大悲大願を起したまふ所以實に此にあり、若し我等にして善を修し、惡を廢し得べくんば殊に超世の大願を建てたまふことあらんや、抑々超世の悲願を起したまひし所以のもの實に苦惱の我等一善一行だに爲し能はざるの點にあり、故に如來の御惠は其罪に對する惠也、其罪を滅し能はざるを憐みたまふ也、其業報を免るゝ能はざるを悲みたまふ也、故に本願の眞意は其罪を滅し能はざるものを特に救ひ、其業報を免るゝあたはざるものをひたすら助けんとこの御心也、超世の悲願と名づけらるゝ所實に此に在り、此の如き本願を聞きながら、猶我惡を悲み我善を勵まんと試むるは、修養としては感ずべきことなれど、其實自己の身の上を知らざるもの也、若し極言せば、我惡を悲むは我惡を去り得

べしとの下心あるが爲也、善を勵まんと試むるは我善を爲し得べしとの賢き思の潜めるが故に非ずや、かくて我惡を悲むは世間的眼光には頗る恭謙なるが如きも、如來に對しては全く頭を下げざる也、我善を勵まんとするは殊勝の態度なるべけれど本願に對しては却て驕慢なる心組となり了せり、實に是れ心を潜めて深く本願の眞意を味ふべき所也。抑々我等が自己の罪惡に對するの態度は恰も浮上らんとする木板を力を以て水底に沈めんとするが如し、如何にも自己の罪深さを觀じて懺悔するその下より、必ず何れの一端か忽ち「されど我とて全くの罪惡に非ず、我のみ罪あるものに非ず」など種々の口實、辭柄を以て浮上らんとする也、而して聊かなりとも果して浮上り得るかといふに其實少しも善くなり得ざる也、されば其實浮上り得ざるも、常に浮上らん／＼との下心絶えざる也、抑々自己として浮上り得るものなれば殊に超世の本願を起したまはんや超世の本願を起したまふ所以は其浮上り得ざる我等を引き上げんが爲ならずや、我等初めて此悲願に遇ひたてまつりて其本願の力にまかし奉りたるとき、今までの浮上らんとする思全く絶えて「とても我力にて浮上り得らるゝものに非ず、今まで木板の如く思惟せし我身

は全く頑石の水中に沈めるが如く、百千萬劫を経るとも一分一厘だも浮上るべき資格なき罪惡の塊たることを自覺するを得たり、此の如く全然浮心の絶えはて、如來の御前に頑石の如く我身を投げ出し得る所是眞の罪惡觀也、是自ら投げ出したるに非ず、如來既に知るしめして『煩惱具足の汝』と呼びたまふ御聲の下に、思はず知らず罪の子として一點のほからひなく慈懷の中に攝取せしめたまふ姿也。

「浮き上り得ざる頑石の如き我身也」と自覺し得る所以のもの、は頑石の如き汝を引上げんとの御惠の手の達すれば也、我等は此御惠の深趣をいたゞく事を忘るべからず、單に我等を憐むとはあらず、誓に我等を愛むといふにはあらず、若し慈悲とし云へば佛として慈悲ならぬはなく、光明とし云へば佛として光明ならぬはなし、今特に大悲大願といひ、諸佛中の王、光明中の極尊と稱せらるる所以のものは超世の悲願、無碍の光耀ましますれば也、超世の超世たる所以は他のすべて道の以て助かり得ざるものを助けんと誓ひたまへる所、超世の願也、他の光明の照し得ざる有碍の我等を照して障礙する所なし、は無碍の光也、かく如來の惠は滅し得ざる罪ある我等を救はんとの惠也、我等の罪は如來の惠ならてはども

を信ぜんのみぞ、願にほこるおもひもなくてよかるべきに、煩惱を斷じなば、すなはち佛なり、佛のためには五劫思惟の願その證なくやましますさんと、嗚呼我等は五劫思惟の願に安んじて煩惱を斷ぜずして涅槃を得べき也、されど如來をして五劫思惟の御心を傷しめたてまつりし所以のもの、抑々我等か煩惱具足して之を斷じ得ざるが爲ならずや、故に五劫思惟の願に安んじて煩惱を斷ぜず涅槃を得ると共に、此とても斷じ盡されぬ煩惱深重なるが爲に五劫思惟の御苦勞をかけし事を懺悔したてまつるべき也故に又救異鈔に曰、彌陀の五劫思惟の願をよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば、そくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、嗚呼我等は永久下に墮ちゆく底下の凡愚也、本願は夫を救はんとの如來の御心也、我等は下に落ちゆく頑石也、如來は之を引揚げたまふ御力也、願力無窮にましますれば、罪業深重もあもからず、佛智無邊にましますれば、散亂放逸もすてられず、嗚呼我等罪惡深重煩惱熾盛のもの、超世無上の悲願に遇ひたてまつりてこそ、無始已來の苦患を免れ、諸の聖尊の重愛に浴したてまつる。南無阿彌陀佛。

一分一厘も浮ぶあたはざる苦海沈淪の重荷なり、此重荷あるが爲に如來超世の願を建てたまひ、此本願あるが爲に我等は此重荷をまかせたてまつりて其苦患を免からせたまふ也。惠は罪に對する惠也、罪は惠ならては浮び得ぬ罪也、罪と惠と相關する夫れ此の如し。

然るに世の信仰を求むる者、罪あるを悲みて其罪の滅すべからざるを知らず、惠あるを仰げとも罪あるを教ふ惠なるを知らず、罪は罪にして其罪に對する惠あるを知らず、惠は惠にして其惠は罪を惠む事を知らず、故に罪と惠と別々にして遂に出違ひとなり、徒らに罪を悲み、氣安めに惠を仰ぐのみにして一喜一憂若存若亡の状態に陥るに至る、故に吾人は罪深きにつけても其罪業深重の我等を捨てたまはざる惠を仰ぐべき也、如來深重の御惠を仰ぐにつけてもかくまでも如來の御心を傷ましめたてまつりし罪惡を懺悔し奉るべき也、罪障功德の體となる、氷と水のごとくにて、氷多きに水多し、障多きに徳多し、是れ不斷煩惱得涅槃の妙旨ならずんばあらず。既に此の如き本願圓頓一乘まします、逆惡を攝受したまふ御力を信じたてまつる一念、煩惱を斷ぜずして、涅槃を得る也、救異鈔に曰く、凡そ惡業煩惱を斷じつゞしてのち、本願

自 督

知 恩 報 德

○御恩を知らせていたゞくといふことは容易のことではない、親鸞聖人の御出世せしませばこそ、我等が如來の御恩を知らせて頂くことが出来たのである。  
○「かたじけなくも我御身にひきかけて、我等が身の罪惡のふかきことをもしらす、如來の御恩のたかきことをもしらすして、まよへるをおもひしらせんがためにてさふらひけり」  
○御恩々々といへば何氣なくいへど、二通りのことではない、當りまへのものがたすかるのではない、逆もたすかるべからざる罪惡の深きものをたすけたまふ御恩である。  
○それゆへ、聖人常々の御述懐に彌陀の五劫思惟の願をよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと仰せられた。  
○このたすからぬものをたすけて下さる御恩を知らして下されたのが御一代の御教化である、廣文類の初に難思の弘誓は難度海を度するの大船と仰せられた、とても度ることの出来ない海を度して下さる御恩である、同様に無碍の光明は無明の闇を破するの慧日なりとあるは、とても明らかになること出来ぬ闇を破りて下さる御光である、こゝが無碍と仰せられ、難思と仰せられた要點である。

○私の親が臨終に『佛が助けて下さるのが難有ござりますな』と親に申したる所、親が『助からぬものを』と冠らせて下されたのが今更つく／＼難有くなつてくる。

○蓮如上人『御膳を御覽じても、人のくはぬ飯をくうべきことよと思召候由仰られ候』衣食につきても、御恩じゃ／＼と口には言ひつゝあたりまへの様に思ひ、衣食ふべきものを衣食ふ様に思ふて居るは實に御恩しらずである、我等は衣食すべき果報のあるものではない、無事で日暮の出来るべき價のあるものではない、人の尊敬を受くべき資格のあるものではない、それが安々と衣食を賜はり、日暮をなし、過分なる果報をいたゞくといふことはよく／＼の御恩である。

○衣食の恩、社會の恩、乃至父母の恩に至るまで、此價なきものに與へらるゝといふことが分からねば恩が分からね、此價なき、罪深きものを捨てたまはぬといふことは眞に如來の御恵である。

○親の恩が分からねぬものがどうして佛の恩が分かるものかといふが世間の言である、されどそは逆である、佛の御恩が分からぬものがどうして親の恩が分かるものか。

○我身が悪い／＼と歎きつゝあるは我身の悪いが知れたのでなく、御恩が難有／＼と喜ぶばかりが御恩が知れたのでなく。

○悪いからよくせねばならぬ／＼といふは修養上から言へば感心なる事なれど、信仰上から云へばまだよくなれる資格のあるものゝ如く考へて居るのである。

○悪くても助けて下さるのが難有いといふのは、眞に我身の

を知らせて貰ふたは實に御開山聖人御出世まし／＼て、我御身にひきかけて、知らして下されたればこそである、其開山聖人の御信心を我身に知らして下された有縁の善知識の御恩である、是實に師主智識の恩徳である。

○聖人が法然聖人の御恩を感謝して、曠劫多生のあひだにも、出離の強縁しらざりき、本師源空いままさは、このたびひなしくすぎなままし、と仰せられ、聖覺法印が情々教授の恩を思ふに實に彌陀の悲願にひとしきもの歎と仰せられたが此處である。

○かく、たすからぬ我身をたすけたまふ御恩がしれた己上は、もはや人生の一大事は終了したのである、多生曠劫の宿題は解決し終りたのである、我身は務として爲すべき仕事はない、殘生の一擧一動皆感謝の生涯である、況んや此の如き高く、此の如く深き御恩に對しては、如何なる感謝も大海の一點、須彌の一塵に過ぎぬのである。

○聖人が聖覺法印の源空上人讚の御言其儘を和讃に作りて曰く、如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報ずべし、師主知識の恩徳も、ほねをくだきても謝すべしと仰せられた、是實に亦我等が聖人に對する知恩報徳の情である、年々歳々報恩講に遇ひたてまつりて、ます／＼罪深き我身なることを知ると共に、ます／＼廣大なる御恩を知らせて貰ふ次第である。南無阿彌陀佛。

悪い事が知れたのじやない、動もすれば猶より已上に悪しきことがなし得る様に思ふ下心がある、眞に底下の凡愚であると分つて居らぬのである。

○聖人が『何れの行も及びがたき身なれば』の一言は實に此よくなる資格なき我身にして、又此上悪くなり得ぬ我身たることを知らして下さる御教化である。

○法然聖人が貧窮困乏少聞少見、破戒無戒の者の爲の撰擇本願なりと示したまひし教を蒙りて、實に難有き御慈悲なりと喜びたまひしことは三百八十餘人皆同様なりしかど、出來得るかぎり念佛の外に善きことをなさんと心の心が残りて居る、何れの行も及びがたき身なればとの自覺が起らなかつた。

○夫故結局自分は貧窮困乏、少聞少見、無戒破戒でないといふことになる、故に我が爲めの本願なりとの心が起らぬ、しかるに聖人ばかりは無戒破戒愚痴無智といふは他人ごとでない、自分の事である、悲哉、愚妄戀愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑すと慚愧せられたのである。

○其業を持てる親鸞を助けんとの本願なれば、ひとへに親鸞一人がためなりけりと仰せられたのである、是實に我御身にひきかけて我等に知らして下された如來の御恩である、是は十方衆生何人も知らねばならぬ御恩である、實に私一人が罪業深重なるが爲に長々の御苦勞を御掛け申しました、五劫思惟の御心配も私一人が悪かつたためであります、今まで輕々と御恩々々と言ふて居たが、かほどまでの御恩とは知らずに居りました、是が即ち如來大悲の恩徳である。

○恩を知るといふことは實に容易なることではない、此御恩

### 聖人追慕

○愚禿と名乗りたまひし聖人の御思召が漸く頂かせて貰ふと出來る様になつて實に嬉しいと共に實に聖人が慕はしい。

○愚禿とは聖人卑謙の稱謂であるといふことは承知はして居れど、我等は卑謙と言へば身を下さることじゃ、一層刻實すれば其實價已下に身を置くことであるといふ意味になる、自分で實價已下に置くべき餘地あるものとすれば、却て是れ自分の實價は底下の凡愚、極惡最下でないことになる、是れ畢竟世間の道義的意味に於て卑謙を解するからである、今聖人の意味したまふ愚禿は直に是れ底下の凡愚、極惡最下の自覺である、若し卑謙といふならば信仰的卑謙とて言ふべきである。

○何氣なく拜讀して居るゆへに何とも思はずに居るが、正信偈の最後に一段聲を高ふして、弘經大士宗師等拯濟無邊極濁惡と仰せられたは、如何にも聖人の罪惡の無邊至極なると共に、亦大悲救濟の無邊至極なることを感謝したまひし御教化である、氣が付きて前をふりかへりて見れば、五濁惡時群生海といひ、凡聖逆勝齊廻入といひ、即横超絶五惡趣といひ、惑染凡夫信心發といひ、一生造惡值弘誓といひ、於哀定散與逆惡といひ、極重惡人唯稱佛といひ、撰擇本願弘惡世といひ、如何にも無邊極濁惡である、實に是れ他人事ではない、我御身にひきかけて私共の事を知らして下されたのである。

○如何にも御流罪に御なりなされて非僧非俗であつて見れば、自ら禿と名乗りたまひたのである、涅槃經に破戒の人を名づけて禿といふとある、して見れば愚禿といふは、愚痴無

智の破戒無戒の人といふことである、撰擇集の所謂貧窮困乏、少智少聞、破戒無戒と云ふは畢竟我身の事であるとの思召である。

○此點に於ては聖覺法印と聖人と御同心である、聖覺法印現に十六門記頭光現顯本地門に自ら記して曰く、爾時始て上人は勢至菩薩の化身なりと知れり、愚禿此篇を記するに身の毛爲整て、雙眼に涙を浮ぶ、憑しきかな、喜しきかな、濁世の我等衆生を導んがために、極樂の聖衆假に凡夫を示し、念佛の行を弘たまふとある、聖人は聖覺法印と同信にして兄事したまひしものと見え、唯信鈔に文意をかき時々釋文によりて和讃を作りたまひし如く、亦愚禿の彌謂をも法印に私淑繼承したまひしものであらう。

○法印は聖人と同じく信の座につきたまひし方にして、罪惡救済の大悲を喜びたまふことは至極にして、唯信鈔に佛如何ばかりの力ましますとしりてか罪惡の身なれば救はれがたしと思ふべきとある。

○されど次に五逆の罪人すら十念の功によりて刹那の間に往生を遂ぐ、況んや罪五逆に至らず、功十念にすぎたらんをやとある、是恰も阿闍世王に對して汝の罪は猶輕しと宣へる佛の御言と同じく、大悲の眼より罪業深重を歎ぐものに對する慰藉の御意にして、決して惡人猶往生す、如何に況んや善人やとの意にはあらざれども、未だ善人猶もて往生を遂ぐ、況んや惡人をやの痛切極る、極惡最下、凡愚底下の親鸞一人が爲なりけりとの聖人の自覺は十分にあらはれて居らぬ、此點に至りては聖人の御出世なくば、我等は即ち極重惡人たること

太子の靈告を信じて、其通り實現されたのである、たとひ法然聖人にすかされまゐらせて念佛して地獄に落ちたりとも後悔すべからずといふ確信である、さればこそ流罪も師教の恩致と喜ばれたのである。

○三十五歳いよ／＼御流罪の時は藤井善信といふ俗名であつた、而して遂に流罪已後愚禿親鸞と名のらせたまひて、極惡深重の衆生、大慶喜心を得て、諸の聖尊の重愛を獲るとの御自督が其儘あらはれてある、ありがた／＼。南無阿彌陀佛。

一 佛法談合のとき、物を申さぬは、信のなきゆへなり。己が心にたくみ案じて、申すべきやうに思へり。よそなる物をたづね、いだしやうなり。心にうれしきことはその儘なるものなり。寒なれば寒、熱なれば熱と、そのまゝ心の通りをいふなり。佛法の座敷にて物を申さぬことは、不信の故なり。又由斷といふことも、信のうへのことなるべし。細々同行により合、讚歎申さば由斷はあるまじきの由に候。

《蓮如上人御一代聞書》

とを知らなんだであらう。

○聖人が五年の御流罪が濟みて、つく／＼過去を顧みて實に我こそは愛欲名利の奴、愚痴無戒の徒也と慚愧したまひし御心のまゝを披瀝してあからさまに御勸免の受書に愚禿親鸞と書きたまひたのであつた、是即ち外に賢善精進の相を現せず、内懷虚假の儘を表されたものである、其一點の飾なき聖人の御心が慕はしくて堪へざるものがある、さればこそ主上臣下の心を感動せしむるに至つたのである。

○愚禿の下には必ず親鸞と仰せらるゝ、即ち此の如き愛欲名利愚痴無戒の我に向て如來二種の本願力回向に遇ひたてまつるといふは如何かなる大悲大恩ぞやと喜びたまふ信樂の情溢れたる御名である、かく頂きて見れば聖人の御名までが同じく私共か頂く御恩を知らして下さるのである。

○或人が私に聖人の御名は其時々々の出來事ある毎に變へたまふたので、其時代々々の聖人の御心が御名にあらはれてあるといふ考を知らして呉れられた、如何にも尤の說である。

○聖人二十九歳法然聖人一座の御説教の下に忽ち聖道難行を擲て、淨土易行道に入られた有様は道綽大師が曇鸞大師の石碑を一幣して淨土門に入り、又源空聖人が四十三歳の時本願に歸せられた同様である故、綽空の御名を貰はれた、如何にも此御名は聖人入信の當時を見るが如くである。

講話

如來は無上法皇なり

《求道學舎日曜講話》

近角常觀

今日の題は「如來は無上法皇なり」であります。此の言葉はもと親鸞聖人の『和讃』に龍樹菩薩讚の中に、

智度論にのたまはく、  
如來は無上法皇なり、  
菩薩は法臣としたまひて、  
尊重すべきは世尊なり。  
如何にも難有く著しき言葉故、之を題にして如來本願の尊き思召を頂かうと思ふのであります。

此の和讃の意は、如來は無上法皇である、此の上なき法のみことであると申すのであります。勿論之は此の世の事に譬へて言はれたので、此の世の事と宗教上の事とはおのづから別である。別であるけれども譬へて言へば無上法皇であるといふのであります。「菩薩は法臣としたまひて」とは、一切の菩薩は皆な其の如來の法臣である。此の故に「尊重すべきは世尊なり」——最も尊むべきは此の世に顯はれ下された如來であるとも知らせ下されたのであります。

其處で今日此の題でお話せんとする第一の要點は何であるか。何を喜び度いのであるかといふに、其の無上法皇の思召である。即ち如來の我々に對して下さる慈悲の奥底を頂くのが肝要であります。其の如來の我々に對せらるゝ御親心の根本は何であるか。即ち如來の本願である。如來の本願は此の無上法皇の如來の親が、我々十方衆生に對して下さる御親心の塊りてあります。夫故我々平日此の如來の本願を何氣なく口にし、又耳にして居る處から、つうか／＼と聞いて居るのであるが、信仰問題の上に於ては、何よりも先づ如來本願の廣大なる思召を深く心中に頂かねばならぬ事である。夫に就き近頃種々の事柄から色々氣附かせて貰ふ事が多いのであります。例の『歎異鈔』の中の本願に就きてのいつもの仰せが如何にも此の廣大なる味ひを示されてあるのである。所謂世間的に言へば重々しき深き味ひが本願といふ言葉の上に斯はれてあるのであります。先づ之から言ひますと第三章に宣はく、

善人なをもて往生をとぐ、いはんや惡人をや。しかるを世のひとつねにいはいはく、惡人なを往生す、いかにいはいはんや善人をやと。この條一旦そのいはれあるににたれども、本願他力の意趣にそむけり。云々。

本願他力の意趣に背くといふ一言が、此の場合實に意味が深いのである。何故かと言ふと、「善人猶以て往生を遂ぐ、況や惡人をや」である。善人すら助ける、況んや惡人は猶ほの事助けずには居られ無といふ、これが本願他力の意趣である。然るに世間一般に言ふ如く「惡人猶ほ往生す、如何に況んや

善人をや」と言ふ時は、此の彌陀の本願他力の意趣とは丸てあべこべになつて仕舞ふのである。夫では彌陀の本願は頂けぬ。如來眞實の親心は、善人でも助ける、況んや惡人は猶ほ助けずには居られ無といふ此の一つである。之が本願他力の眞の意趣であるといふのであります。此の本願他力の意趣といふ一言が實に有難いのである。

又第九章には  
よろこぶべきころをさへてよろこばせざるは煩惱の所爲なり。しかるに佛かねてしらしめして煩惱具足の凡夫とおぼせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときわれらがためなりけりとしられていよくたのもしくおぼゆるなり。

「他力の悲願は斯の如き我等がためなりけりと知られて彌陀たのもしく覺ゆるなり」と、此方の頂き振りに力を入れずに他力の悲願の廣大なる思召を頂かねばならぬのである。如來の廣大本願は其の煩惱具足の凡夫を助けんといふ他力の悲願である。我々が「斯の如き我等が爲なりけり」と易す／＼頂ける所以のものは、向ふの方に此の「佛かねて知し召して煩惱具足の凡夫」と仰せ下さる、其の廣大なる悲願が居て下さるからであります。

又同じ章の次ぎには  
いそぎまいりたさくるなきものを、ことにあはれみたまふなり、これにつけてこそいよく／＼大悲大願はたのもしく往生は決生と存じさふらへ。云々。

此の大悲大願が一通りの大悲大願で無い、急ぎ参り度き心の

無き者を殊に哀れみ下さる大悲大願である。「之につけてこそ彌々大悲大願は頼母しく、往生は決定と存じ候へ」である。如何にも廣大のお慈悲であります。以上は今氣が就いた丈けを申したのであるが、何時も讀む度びに此等の御文に至り、如何にも其のお力強さに胸を打たれる如く感ずるのであります。

又十二章には

いまの世には學問してひとのそしりをやめん、ひとへに論議問答をむねとせんとかまへられさふらふにや、學問せばいよく／＼如來の御本意をしり、悲願の廣大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかゞなんど、あやぶまんにひとにも、本願には善惡淨穢なきおもひさをもとさきかせられさふらはゞこそ學生の甲斐にてもさふらはめ。云々。  
「學問せば彌々如來の御本意を知り、悲願の廣大の旨をも存知して」といふ其の悲願の廣大の旨とは何であるか。卑しからん身にて往生は如何なんど、危ぶむ人もある。けれどもそんな善惡淨穢の區別あるお慈悲では無い、といふ其の廣大なる悲願の旨をも説き聞かせられ候はゞこそであります。猶ほ此の外此の類の御言葉は澤山にあります。斯の如く『歎異鈔』何處を巻くよりも本願他力の意趣とか、大悲大願の親心とか、悲願の廣大なる旨とかいふ文字が出て來るのである。之が實に頂き處であります。

さて之を特に今日際立て、申したは何かといふに、兎角信仰を頂く上に於て誰でも思ふ事は、何うか早く信仰を得度いものである、早く喜び度いものである、早く悩みを晴らし度

いものであると、色々と自分に思ひ爲して求むる事が多いのであります。處が過去五六年來の傾向を見るに、凡ての人が人生に悩み苦しんで居る其心中に、一點如來のお慈悲が聞えるなり、恰も夢の醒むるが如くに悩みが去つて喜びを生ずる。其の様は恰も目に光を見、形に佛に遇へるが如く喜んだ人が多かつたのである。而して其の喜んだ人も自分と言ふ時は光に遇つたとより外に言ひようが無く、又其の様子を見る者も唯不思議と言ふより外に言ひ様が無い、といふ風に頂いた人が多かつたのであります。斯く言ふと其喜びは、唯光に遇つた、嬉しくなつた、有難くなつたといふ丈けかと言ふにさうでは無い。其の如く其人達が喜ばれたのは、言ふ迄も無く如來のお心が確に此方の心に届いて下されたからである。去りながら其届いて下された心持は、之を如何にしても自分に言ひ表はす事も出来ねば、人も想像する事が出来ぬ。其處で從來は實驗である／＼と私も言ひ、人も言ひ來つたのである。又之に違ひも無いのであります。

處がさうなると今度は、其の實驗を仕度い／＼といふ念慮が求むる人の心に段々強くなつて來たのである。之は實に無理からぬ事でありませぬ。けれども此の實驗は此方から求めて出來るのは無い。向ふからお心が届いて下さる故に頂けるのである。此方の計ひで得られるのでは無い、向ふの光が到つて下さる故安心が出来るのである。然らば其の慈悲の光にはいつ遇へるか。光が向ふより來て下さらなければ遇へぬのか。廻向ならば向ふより來て下さる時でなければ得られぬか。無い。すれば純粹他力である爲めに却て頂けぬでないか、

など、其爲に却て苦む人なども多くなつたのである。成程如來より與へて下さるお心に違ひなければ、夫が或る特殊の人のみに向つて居て下さるのでは無い。大悲の上より言ふ時は、如來は此のお慈悲一つを知らさんが爲に、常に絶えず我々一人々々の上に向つて居て下さるのである。殊に深く氣を附け度いのは、其の廣大のお慈悲は我々が出遇ふの觸れるのと、そんな薄弱な言葉で言ひ表はず段では無い。眞實我々一人々々に常に向ひづめにして、下さる親が居て下さるのである。其の御親心が即ち本願である。此の親心を我々は聞かせて貰はねばならぬのである。此の親心に氣が附くなり何人も安心して喜ばせて貰ふ事が出来るのであります。

之をもつと言葉を角立て、言ひますと、實驗々々と言つたからとて、何も特別の場合が有るのでは無い、常に待ち受け給はる此の廣大の親心を頂く外に無いのであります。夫故若し實驗して喜ぶと言ふならば、一旦其のお慈悲を實驗した人も、お慈悲に入つた時は喜びも著しいが、年の経つと共に夫程の喜びが續か無い。設ひ續か無くても、もつと昔のやうに喜ばねばならぬと、喜びの温みを何時迄も保たんとするやうな思ひを持つ可きでは無いのである。お慈悲の上の喜びは、我々が此方で繰反したり、此方で努めて喜ぶのでは無い。もと我々が斯く喜び斯く樂むやうになつたのは何故であるか。此の親心が届いて下されたからである。其の親心の絶えざる限り、いつ氣附かせて貰つても有難いのである。て我々がお慈悲に氣が附くと言ふのも、又其の喜びを相續するといふのも、此の無上法皇の如來の大悲大願の意趣、悲願の眞意に氣

なので深く感じた次第でありました。

處が其の所へ、陛下の御使ひで北條侍従が態々お出で下されてお見舞ひ下されたのである。勿論其の前に内務省から參事官が来て調べて行かれたのであるが、併しまだ地方廳からも何處からも手の届かぬ先きに、最も早く、陛下よりのお使がお出下されて、殊に直々に苦しんで居る者を御慰問下されたのである。猶ほ一つ前から言ひますと、其の前にも色々の方々が御見舞下され、中には随分高貴の人もお訪ね下されたのである。そういふ際に之に對して此方は實に恐入つた事である。何うかして充分に接待し度いと思ふが、場合が場合故其の暇が無い。其の爲め思ふ丈けの敬意を表する事が出来ぬので如何にも残念であると、私自身が思つた事があつたのである。もつと際立て、言ひますと、世間から斯くの如く色々見舞の人が来て下さる。之に對して何うしたら思ふ丈けの接待が出来ようかと私自身が心を碎いたのである。が何分田舎の事故何とも仕様が無い。あれも足らぬ、之も足らぬばかりである。色々工夫して見るけれども、敬意の表して見様が無い。其爲め私自身が深く氣を揉んだのであります。其後私は直ぐ傳道に出かけた。其あとで北條侍従のお出下された事を知つたのである。北條侍従がお出下されて、或は歴死者の家に立寄り、或は老人ばかり遣つた處へ尋ねて行つて一々御慰問下された。而も其もお出下された時には、最初に次いでの大地震があつたのである。夫にも係はらず自から一々其家を訪ねて哀れの者を慰めて下された。私は此事を新聞で讀んで實に深く感じたのである。昔ならこんな事はあるまいに、今は陛下

附かせて貰ふ、此の外に信仰は無いのである。此の外に異なりたる理屈や珍らしき味ひがあるのでは無いのであります。又時節が到らなければ頂けぬといふが、到る到らぬは此方の事、佛は何時如何なる人の上にも常に來りづめにして下さるのである。實は其の來づめにして、下さる如來のお慈悲を、此方の計ひ心で邪魔して居るのである。此のお慈悲一つを頂いて見ると、十方法界何時如何なる處でも、如何なる人でも頂けるのが如來廣大のお慈悲である。といふ事を此頃殊に思はせて頂いて居る次第であります。

## 二

さて之より此の題を出した當時の無上法皇といふ感想を例を以てお話致さうと思ひます。之は先達てより或は講話に、或は個人に、何度お話したか解らぬのである。定めて皆さんも度々耳にして下された事と思ひますが、如何にも私には此の一例が有難い。言ひ換へれば此の一例の爲に私は以前に頂いて居たよりも一段うづ高く、一段樂々と頂けるやうになつたと思ふのである。之をも一度話さうと思ふのであります。夫は此の夏私の郷里の地震の際に、陛下よりお見舞ひを下された話である。即ち不意の震災の爲めに私の郷國では澤山の歴死者や、澤山の倒れ家が出来た。其の爲め澤山の人間が難儀して、喰ふに食なく着るに衣服なく、戦々競々として皆な露宿してるといふ有様であつた。嘗つても申した如く前私の家に住居た若者も一人此の爲めに亡くなつたといふ有様である。私は其時傳道より歸つて、如何にも其實況が想像以上に悲惨

下より直々のお使ひが来て下されて、直々お見舞ひ下さるのである。殊に今度一層感じた事は、此の度伊藤公の葬式に陛下の御名代でお出になつたのも矢張り北條侍従である。伊藤公の葬式に、陛下の思召をお傳へなされたのも北條侍従であれば、國の震災に際して之を御慰問下されたのも北條侍従である。實は此度伊藤公の葬式は各國の代表者も集まる事であり、どんな方が御名代でお出になるかと思つて居たのである。すると矢張り北條侍従である。之を頂くと、陛下御自身でお出にならぬ限り、いつも陛下同様の北條侍従を差向け下さるのである。國の重臣を葬るといふ大事の場合にお遣はしになる方も、又我々破ら家を戸毎に慰問させて下さる方も、更に變はりが無いのである。之を見て私は今度熟々陛下の一視同仁のお恵みである事を感じさせて頂いたのであります。世間では一視同仁は公平である事位に思つて居るが、中々夫れ位いな事ぢや無い。如何なる者に向つても、もう其以上は仕方が無いといふ其極度を盡して下さるから一視同仁なのである。

陛下のお意にして見ると、國家の大勳位を吊する場合にも、百姓の罹災民を慰めて下さる場合にも、もう其以上は仕て見様が無いのであります。

其處で頂くに、陛下が特に地震の際北條侍従を遣はして御慰問下された御意趣は何んであるか。百姓が地震の爲めに難儀して居る。其の難儀して居る奴を殊に哀れと思召して遣はし下されたのである。私は此の時先程いふ『歎異抄』の第三章を熟々味はせて頂いたのであります。

悪人なをもて往生をどく、いはんや善人をや。云云。  
 先きに田舎の地震の時さへも北條侍従を遣はされたのであ  
 る。況んや國家の大勳位の葬式にはどんな方が行かれるかと  
 思ふたのは「悪人猶ほ以て往生す、況んや善人をや」の積りて  
 居たのである。處が「陛下の方では「善人猶ほ以て往生を遂  
 ぐ、如何に況や悪人をや」であつたのである。陛下のお意  
 にして見れば、善惡邪正貴賤老若、功の大小、位の高下は更に  
 お構ひ無いのである。否悪ければ悪い丈、難儀してればして  
 る丈け彌々其者を不慙と思召し下さるのである。殊に江州の  
 震災の際は善人猶ほ以て往生す、況や悪人をやの方であつた  
 のであります。皆な一體に御慰問下されたのであるけれど、  
 殊に難儀して居る者をお見舞ひ下されたのである。其の御慰  
 問使を下された。陛下の御本意は何であるか。地震で皆んな  
 が難儀して居る。其の最も難儀して居る者の様子を聞き召し  
 て、先づ其者より慰めよと向ふより御使者をお遣はし下され  
 たのである。之が「陛下の大御心であります。其の際には、  
 當り前の者すら猶ほお見舞ひ下さるのである。況んや難儀の  
 甚しい者は、猶ほお見舞ひ下さるのである。暮しの立つ者よ  
 りも、立たぬ者、笑ひの多い者よりも、少い者とお見舞ひ下さ  
 れたのである。一家打揃ひ無事て居る者よりも、親に別れ子  
 に別れた者をお見舞ひ下されたのである。茲になると、慘  
 狀の甚しき者程、彌々其者をお見舞ひ下さるのであります。  
 さて斯く頂くと如何にも哀れな者程彌々之をお見舞ひ下さ  
 るのである。其の廣大の思召を我々は何んと頂いてよいので  
 あるか。何も外の事を爲るには及ばぬのである。國ではお使

者を案内する人が居て、如何なる處に案内するか。最も慘狀  
 の甚しき處を選びに擇つてお連れ申したのである。其の選り  
 に擇られた者は、其の廣大の思召を何んと頂いたらよいので  
 あるか。こんな處へお出下されては勿體無い、こんな取込の  
 所へ来て下されては實に恐入ると、此方から辭退してると方  
 角が間違つて仕舞ふのである。陛下の思召は何うであるか。  
 其の難儀して居る者が可哀想である。其の哀れな様を目撃し  
 て手づから之を慰めよとお遣はし下されたのである。して見  
 れば此方の方で何も其の痛ましき有様を飾り立て、無理にお  
 迎をするには及ばぬのである。其の困窮の場合から、無理に  
 禮服用用でお待受けするには及ばぬのである。此の御使ひを  
 頂くに、いや接待をせねばならぬ、いや響應が足らぬなど、  
 そんな事思つて居たら大なる間違いと云はねばならぬのであ  
 る。と申すのは何んであるか。私自身が其の以前或る高貴の  
 方がお出下された時、場合が場合故何共仕て見様が無いと、  
 其の仕て見様の無い處へ態々お出下された思召は頂かずに、  
 唯此方の頂き振りに大に苦しんだからである。然らば其の思  
 召は頂いて居ぬかといふに、否自分では大に頂いて居る積り  
 て居たのである。けれども夫が眞に頂けて居るのなら、そん  
 な氣持が出よう筈は無い。其の仕て見様の無い處へ態々お見  
 舞ひ下されたは何故であるか。此方が其の仕て見様の無い者  
 であるからである。其者が可哀想であると、お訪ね下された  
 のである。夫を仕て見様が無いから困ると氣を揉んだは何故  
 であるか。『歎異鈔』の第三章は常に人にも言ひ、自分にも喜  
 んで居たのであるが、其の時にになると、斯の如く間違つて

仕舞つたのであります。氣が附いて見ると、禮服であるの、  
 御馳走であるのと、其處どころでは無いのであります。若し  
 其方のお出下された時、田舎の翁媪が自分のこしらへて、  
 いや響應であるの接待であるのと、そんな事に氣をとられて、  
 折角の思召を頂かなんたら何うであらうか、如來のお慈悲を  
 頂くもこれでありませう。  
 今我々が信仰を得たら、もつと敬虔の念が有りさうなもの  
 である、もつと眞地目になれさうなものである、もつと喜び  
 の心が有りさうなものであるなど、言つて居るのは、普通か  
 ら見れば成程無理もなさうである。けれども今阿彌陀如來  
 が衆生に臨んで下さるのは何うであるか。唯本願といふ丈な  
 らば、總ての佛に本願の無い佛は無い。藥師の本願、彌勒の  
 本願、如何なる佛にも必ず其佛の本願がある。而も皆な衆生  
 を哀れみ哀むといふ本願である。斯くの如く當り前の佛でも  
 哀れの者を救ふといふ本願であるに、今阿彌陀如來の本願が  
 超世無上の本願であるといふのは何故であるか。無上法皇と  
 申すは何故であるか。此の超世無上、無上法皇と言はれた思  
 召を能く頂かねばならぬのであります。

三

茲になると「和讃」に宣はく、  
 超世の悲願さしより、われらは生死の凡夫かは、  
 有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にすみあそぶ。  
 親鸞聖人が超世無上の本願と仰せられたは、中々一應の事では  
 無い。地震の際にはお見舞は何づ方よりも来て下された。

どのお見舞ひも哀れの者をお見舞下されたのであるが、陛下  
 のお見舞ひを頂くとなると、此方では彼れ是れ言ふのでは無い。  
 北條侍従がお出下され、一々百姓家に足を運んで下さる。此  
 の廣大のお恵みを頂くとなると如何にも斯の如き哀れの者を  
 殊に哀み下さるお慈悲であると、自分を忘れ、あたりを忘れ、  
 唯廣大の思召に感泣し、大悲の恩徳に泣くより外は無いので  
 ある。如來の超世無上の本願を頂くも茲であります。  
 之を親鸞聖人のお言葉で頂くと、『教巻』に宣はく、  
 如來の本願を説くを經の宗教と爲す。即ち佛の名號を以て  
 經の體と爲る也。云云。  
 親鸞聖人の淨土眞宗は此の如來の本願を説くより外は無いの  
 である。然らば其の如來が此の人生に顯はれ下されたは何故  
 であるか。此の仕て見様の無い者の爲めに、其の廣大の本願  
 が届いて下さる處は何處であるか。超世の超世たる處は何處  
 であるか。茲を能く頂かねばならぬのである。  
 抑々一切の宗教に、恵みを言はぬ宗教は一つも無いのであ  
 る。慈悲慈愛といふ事は何の宗教でも皆な言ふのであります。  
 又佛教で言ふ時は、苟も佛といふ以上は、皆な衆生を哀れみ  
 下さる慈悲である。て無ければ佛に意義が無くなつて仕舞ふ  
 のである。又其佛が在します以上何れの佛にも本願の無い筈  
 は無い。本願とは總ての佛が我々を哀れみて佛の姿を顯はし  
 下された、其本意をお示し下されたものである。何れの佛に  
 しても、何が目當てがなくては、此の世に出現下さる筈が無  
 いのであります。之は解らばよい爲に言ふのであります。聖  
 人は『行卷』に宣はく



諸佛の所證は平等にして是れ一なれども、若し願行を以て來し收むるに因縁なきに非ず。然るに彌陀世尊もと深重の誓願を發して、光明名號を以て十方を攝化し但信心をして求念せしむ。云云

即ち諸佛の所證は皆な平等一如である。何れの佛と雖も佛の境界に階級區別のある筈は無いのである。併しながら其の佛の姿に色々異なつた姿の出來たは如何なる譯か。即ち本願が夫れ、異なつたからである。即ち藥師如來は藥師如來の本願で藥師如來とならせられたのである。地藏菩薩は地藏菩薩の本願で地藏菩薩とならせられたのである。本願が違ふから斯く利益も違つて來たのであります。唯本願とだけ言ふ時は、凡ての如來が絕對眞如の境界より衆生濟度の爲めに姿を顯はさせられた其思召が本願である。唯本願といふ丈けては、まだ哀れの者を救ひ下さる眞の大悲は頂けぬのであります。處が今其の本願の中でも、殊に阿彌陀如來の五劫思惟、兆載永劫の超世無上の本願とは何んであるか。

之は此間朝「正像末和讃」を拜讀しつゝ感じたのであります。が、聖人は宣はく

正法の時機とおもへども 底下の凡愚となれる身は、

清淨眞實のこゝろなし 發菩提心いかせん。

我々當り前に佛敎を辿り、佛の敎えに従ひて佛道修行するならば、佛の通られた道を踏み、佛の保たれた戒を保ち、佛敎者らしき振舞をせねば佛者とは言はれぬのである。之が當り前なのである。殊に成佛の大問題は、上求菩提下化衆生で、菩提心を起すのが第一の肝要である。處が我々にそんな事眞

て居るのである。何れかの如來の本願に願うて今迄に成佛出來て居さうな筈である。現に今も言ふ如く、藥師如來には藥師如來の本願が、ちやんとあるのである。其の本願に従うて修行が出來れば、必ず成佛出來るやうに仕て置いて下さるのである。けれども我々にそれが出來ぬから仕方が無い。此の點になると大聖釋尊の敎と雖も釋尊の通られた道を通り、釋尊の言はれる如き修行の出來ぬ我々には、仕て見様が無いのである。其處で「正像末和讃」の初めには

釋迦如來かくれまし、 二千余年になりたまふ、  
正像の二時はをはりにき、 如來の遺弟悲泣せよ。

親鸞聖人は思ひ切り斯くお示し下されたのである。

茲で我々の頂く事は、斯くの如く釋尊一代の敎説と雖も、其の敎を通りに出來る事は我々には一つも無いのである。成程阿含經若法華涅槃等色々の敎法はある。けれども我々が之を讀みて眞に其の敎を通りに出來る事が其中に一つとして有るか。之を讀みて唯尊いといふ位の事なら言へるかも知れぬが、彌々眞にやるとなると我々には一つも行へぬのである。斯く言ふと初めての人、他力信仰の者は初めから何もかも出來ぬ、と投げ捨てると言はるゝかも知れぬが、實際我々は善い加減の事なら出來るかも知れぬが、眞地目の意味に於ては

一步も動かぬのである。傳教大師は「末法燈明記」の中に

末法の中に持戒の者有らば、既に是れ怪異なり。市に虎あらんが如し

と説き下されてある。去りながら斯く言へばとて、夫だから

我々は戒を持たないでよい、善を爲さなくてもよいと云ふのでは

地目な意味で出來るかといふに出來ぬ。親鸞聖人が正像末と仰せられたば茲である。佛滅後五百年は正法の時機と申して、此の間ならば或は證に行く事も出來るかも知れぬ。がはい其次の像法千五百年になると、如何に修行を凝しても證に至る事は覺束無い。況んや最後の末法萬年になると、行證は消えて仕舞ふ。そんな事眞似する事も出來ぬやうになつたのである。或は佛在世の正法の時代に生れたなら、出來たかも知れぬが今となりては末法である。底下の凡愚となりてはた身の上である。清淨であるの眞實であるのと、そんな心は兎の毛の先き程も無い。菩提心を起して佛に向ふなど、そんな事は逆も出來よう筈は無いのである。又

自力聖道の菩提心、 こゝろもことばもおよばれず、  
常没流轉の凡愚は、 いかてか發起せしむべき。

皆んなは自分で善い心にならうと苦しんで居るのであるが、此の自力聖道の菩提心は、我々は心に想像する事も口に言ふて見る事も出來ぬ身の上となり下つて居るのである。此の常没流轉の凡愚の身として、そんな望みは疾くに絶え果て、居るのである。

三恒河沙の諸佛の 出世のみもとにありしとき。

大菩提心おこせとも、 自力かなはて流轉せり。

此の菩提心でしくじつた事は我々今生に初めては無い。佛の敎によると今迄に度々起してはしくぢつて居るのである。夫も二三度では無い。三恒河沙の諸佛の、出世のみもとにありし時、大菩提心起せども自力かなはて流轉せりである。菩提心で成道が出來る位ならば、我々は今迄に多佛に出遇ふ

無い。去りながら仕度くても我々には夫が出來ぬから仕様が無いでないか、茲に於てか何か一道が顯はれて下さらなければ、我々は何うにも斯うにも仕て見様が無いのである。茲の所で我々は自分の心で善い加減な事をこしらえて通つてはならぬのであります。

さて法然上人の選擇本願の御敎化が、即ち茲であります。

即ち我々若し戒行で行けるなら戒行で行くがよい。座禪で行けるなら座禪で行くがよいのである。けれども我々は諸佛の敎では行く事が出來ぬのである。茲に於てか選擇本願が來るのであります。和讃には宣はく、

像末五濁の世となりて 釋迦の遺教かくれしむ、  
彌陀の悲願ひろまりて 念佛往生さかりなり。

即ち像末五濁の世となりて、我々に出來る事はもう一つも無いのである。夫だから彌陀の悲願が弘まりて、念佛往生の敎が彌々盛んになつて下さるのである。而して其の悲願とは如何なる悲願であるか。

超世無上に攝取し、 選擇五劫思惟して、  
光明壽命の誓願を、 大悲の本としたまへり。

「超世無上に攝取し、選擇五劫思惟して」である、此の選擇といふ一語をうづかり聞いてはならぬのであります。即ち我々は世間普通の修行や戒行では逆も行く事が出來ぬのである。ぢやによつて其の修行戒行で行けぬ者、其の惡業の止まぬ者、地獄一定の其者を殊に哀れみ下されて、何うかして悟の境界に連れ行つてやり度いと云つて下さるのである。之が抑々大悲大願の根本であります。茲はち互に言葉すべりのせ

ねやうに聞かねばならぬ。今迄の説教では此の佛の言つ下さる事を、先きに此方で言つて仕舞ふから茲で言葉が滑つて仕舞ふのである。陛下の方より御使を下されて、其の御使の仰じやる處を、此方で先きに言つて仕舞ふからいかぬのである。此方は物を言ふには及ばぬ、唯向ふの仰せを承はればよいのである。其の仰せを承はるとは何を承はるのであるか。選擇本願念佛といふ此の一つを承はるのである。此の選擇本願念佛の仰せを承はれば、戒行や座禪や修行で助けるのでは無い。戒行や修行や座禪の出來ぬ其者を、殊に哀れみて選擇本願無阿彌陀佛の一つを與へて、之を以て助けると言つて下さるのである。すると今の世に戒行や座禪や修行で助からうなどと、そんな事思つて居らぬと言はるゝかも知れぬ。去りながらこんな心では仕様が無い、こんな悪い心は、よ止めて、もつと確つかりした心になり度いと言つて居るのは自力の菩提心では無いか。さう思ふ一つがは、自力の菩提心を起して居るのである。我々が自分の心が暗いとして泣く位なら、煩惱具足の凡夫とは仰じやらぬ。衆生貪瞋煩惱中とは言はぬのである。我々の此の心が自分てようなる位なら阿彌陀如來は初めから御苦勞は下さらぬのである。去りながら斯く言へばとて、夫れだからかまはぬと言ふのでは無い。我々が日夜に煩惱を起しつゝ、煩惱を起してもよいといふ筈は決して無いのである。地震で態々向ふよりお使ひが來て下されて、其の慘まき有様をお尋ね下さるに、此方は一杯の御飯も差上る事が出來ぬ。差上げらなくても夫てよいといふ譯は決して無し。差上げべきは何處迄も差上げ可きなのである。けれども

煩惱を斷じなばすなはち佛なり。佛のためには五劫思惟の願その詮なくやましますん云々。

我々の方では何か善い事が出來さうなものだと思つて居る。此方で善い事が出來る位なら佛の願はいらぬのである。我々は光を認め度いと思つて居る。此方で光を認めるので無い。佛のお光で此方が認められるのである。此方は何爲る事も出來ぬのである。此方が手がりの無い事を御覽下されて、其者が可哀相であると、眞如一實の境界より絶對大悲のお意をお起し下されたのが本願である。我々の頂くのは此の本願のお慈悲一つを頂くのであります。

茲になると眞宗の教えは實に有難い。世間では能く五劫思惟など言ふから六かしい、そんな事いふから解る事迄解らなくなつて仕舞ふ、そんな事言ふよりも唯恵みてある、慈愛である、お慈悲であると言ふた方がよいは無いかといふ人がある。さういふ人には五劫思惟とか、南無阿彌陀佛とか、却つてけつまつきのもとなつて居るのである。去りながら唯慈愛と言ふなら一切の諸佛は皆な慈愛である。唯智慧といふのなら一切の諸佛は皆な智慧である。今阿彌陀佛の本願が何故特に有難いのであるか。超世無上の御本願であるからである。此の苦惱の者を見をなはして、其者を特に救はんとの特別の思召であるからである。茲を頂かねばならぬのであります。之を頂くと難有く思はれぬといふ筈はない。此者を哀れみて態々お出下されたといふのである。之を承はると六かしいといふ筈は無いのである。何故六かしいか、皆んが自分で善くしてから頂く積りて居るからである。我々が自分で善

向ふのお意を頂くと、此方が其の如き者故、其者を殊に哀はれみて、其者の爲めに態々お出下されたといふのである。此の廣大なお意を頂くと、此方の心が何うの斯うのと、そんな事言つて居られぬで無いか。超世無上に攝取し、選擇五劫思惟して、光明壽命の誓願を、大悲の本としたまへりである。此のお互をお救ひ下さるに、爾の行ひを正しくせよ、爾の心を清うせよ、とそんな事言つてゝは間に合はぬ。光明壽命の誓願を、大悲の本としたまへりである。光明無量壽命無量の佛のからだ一つで、如何なる者をも救ふ。此の絶對力一つで如何なる者をも後生安樂國に生れさせる。といふのが大悲大願のお意であります。

茲てお互の喜ぶ可き事は、此の本願で佛が來て下されたといふ處である。茲を喜ばねばならぬのであります。佛が來て下されて我々迷ひの凡夫が出來たのでは無い。我々は無始の始めより迷ひに迷つて居るのである。昔から戒行修行の出來ぬ惡凡夫である。こゝになると所謂「我未法時中億々衆生、起行修道、未有一人得者」であります。然るに其の一人も無き事を佛は兼ねて御覽下された故、其者が可哀相ぢやと。此の可哀相が凡夫の此方で決めるのでは無い。兎も此方で決めるから、もつと善くなれ相なものぢやといふ思ひが出て來るのである。其者を助ける爲に態々超世無上の本願をお起し下されて、其の結果として佛が顯はれ下されたのである。若し我々がなければ佛のお出下さる譯も無く、五劫思惟の御苦勞を爲て下さる事も無いのである。茲になると「歎異鈔」には宜はく、

くして頂くので無い。我々が斯くの如く苦しんで居る、其處へ此の超世無上の本願が現はれて下されたのである。之を承はる一念には、如何にも廣大の恵みにて在しますと頂く外は無いのである。

又も一つは其のお慈悲の佛が確かに御座るか御座らぬかといふ問題である。即ち其のお慈悲の佛が實際に存在するか何うかといふ疑ひである。之が又お慈悲を頂く人の上に非常なこだわりになつて居るのであります。去りながら之はお慈悲を頂く上にこだわり可き問題では無い。有るも無いも無い、現にお使ひが眼の前に立つて下さるのである。眼の前に立つて下さるのに、有るか無いかの言葉が出よう筈は無い。有るか無いかはお慈悲の届く届かぬで決まるのである。相手無しにお慈悲の來て下される筈は無い、相手は此の身を哀はれみ下さるお慈悲である。此の超世無上の如來のお恵みが聴えて下された一念に、あゝ難有いお慈悲であると頂けるのである。言ひ換ふれば慈悲とは此のお互一人々々に向うて下さる此の廣大の親の御親心であります。

四

さて斯く頂く、超世の悲願さしより、われらは生死の凡夫かは有漏の穢身はかはらねど、こゝろは淨土にすみあそぶ。と喜ばすには居られぬのであります。我々は自分の身を考へると何時迄も罪惡深重煩惱熾盛の衆生である。然るに其者を哀れみ下さるといふ超世の大悲大願である。茲は邪見に陥り

易すけれどよく頂かねばならぬのであります。若し當り前の道から言へば、我々は修行し戒行を持ちて一歩々々悟りに行く可き善なのである。惱みが多くなり煩惱が深くなればなる程、悟に遠ざかる可き善なのである。之が當り前なのである。設ひ他力と雖も一應ならば然うあるべき善である。少くとも我々煩惱が多くなり、苦しみが加はれば加はるだけ、確かな思ひが薄らいて来ねばならぬのであります。處が我々のは然うぢや無い、其の煩惱が多くなり苦しみが来れば来る程其者を哀れみて下さるといふのである。此方が喜べねば喜べぬ者程殊に哀れみ下さるといふのである。こゝを能く頂かねばならぬのであります。去りながら茲は此方で計はぬようにせねばならぬ。我々は茲を斯う頂かねばならぬなど、親の言ふて下さる事を、此方で言うて仕舞ふ。親の仰せ迄も無く、此方で先きに決めて仕舞ふ。夫だから『歎異鈔』の九章を何邊讀んでも安心が出来ぬのであります。親の仰せを頂かずに自分てきめて居るからいかぬのである。此方で物を言ふのでは無い。此方で物を言うとなると、これていかぬ、あれては濟まぬと思ふのが人間の性分である。こんな事では慈悲を頂いたとは言へぬと言ふて居るなら當り前である。其處を佛は如何に仰せ下さるか。

よろこぶべきことをおさへてよるこぼせざるは煩惱の所爲なり。……  
喜べぬのは凡夫の當り前である。  
……しかるに佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とあほせられたることなれば、……

である。喜ぶのは茲を喜ぶのであります。數年前苦しんで信仰に入られた人の多かつたも、皆な茲一つを喜ばれたのである。自分のような悪い者、斯ういふ者をお救ひ下さると氣が附く一念には、天地に躍り上る程に喜ばしい。其の様を他から見ると踊躍歡喜の喜びである。喜びは慈悲に氣のついた結果である。有難いのは唯此の本願一つが難有いのである。夫に就き逆如上人は『御文』に

阿彌陀如來の仰せられけるやうは、未代の凡夫罪業の我等たらんもの、罪はいかほど深くとも我を一心にたのまん衆生をば必ず救ふべしと仰せられけり。云々。  
罪は如何程深くとも我を一心に頼まん衆生をば、必ず救ふべしとあるが本願の親心であります。

さて斯く頂くと三世十方の諸佛が、各其世々に顯はれて法を説き下されたは何であるか。此等の諸佛が各其佛相應の本願を立て、我々を導き下されたも外では無い。此無上法皇の本意を知らせん爲めに御出下されたのである。大聖釋尊が此世に出現せられたも、戒定慧や六度の行を説くが本意では無い。此の本師本佛の悲願を知らせんが爲めに御出下されたのである。聖人は『正信偈』に宣はく、  
如來世に出興する所以は、唯彌陀の本願海を説かんとなり、云々。

此の廣大の親ありと知らせんが爲に、御出下されたのであります。話が長くなりますが、近頃は或る意味に於て實行風の問題が多くなつたのである。今迄の多くの人は、心に悩み苦しんで

煩惱具足の凡夫とは佛より言つて下さるのである。佛より斯く言はれて見ると、善くなれば喜ばれぬと言つて居る其者を見込みて、其者を救へよと下された。陛下よりの御使であつた。夫に此方が凡夫の計ひて「こんな事では」と思つて居たのは實に勿體無いと、斯く氣の附く一念に

……他力の悲願はかくのごときわれらがためなりけりとしられていよ／＼たのもしくおぼるなり……  
といふは、はや超世無上の本願に出遇うて、他力の悲願は此の外に無いと、彌々頼母敷く喜ぶのである。

……またいそぎ浄土へまいりたきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死なんざるやらんとこゝろほそくおぼゆることも煩惱の所爲なり。久遠劫よりいまして流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、未だむまれざる安養の淨土はこひしからずさふらふこと、まことによく／＼煩惱の興盛にさふらふにこそ。

こんなひどい心では耻かしい、こんなひどい心で極樂に往けるか知らぬ、極樂往生を樂まぬとは如何にもひどい心である、と思ふのも煩惱の所爲である。

……なごりおしくおもへども娑婆の縁つきて、ちからなくしてをはるときかの土へはまいるべきなり。いとぎまひりたきこゝろのなきものをことにあはれみたまふなり……とは佛本願のお意を言つて下されたのである。往き度く無い者を殊に哀れみ下さるのである。  
……これにつけてこそいよ／＼大悲大願はたのもしく往生は決定と存じさふらへ。

求められたのであるが、近頃は實行上より人生に突き當りて信仰の問題に來る人が多いのである。此等の人は其の突き當つた時何う考へるかといふに、こんな心では仕様が無い、もつと善くせんならぬ／＼と思ふのである。又他人に對して、こんな不同情な事仕様が無い、もつと親切にせねばならぬといふ風に考へるのである。先づ一言に言ふと近頃は斯ういふ風の思想が多いのである。處が斯ういふ風の問題は如來は前から解決して置いて下さる。其の突き當る者が可哀相ぢやと、超世の悲願が來て下されたのである。夫を口では慈悲々々々と言ひながら其の悲願の御眞意を頂かぬ。『歎異鈔』で言へば、

くちには願力をたのみたてまつるといひて、こゝろにはさこそ悪人をたすけんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそたすけたまはんずれとおもふほどに、願力をうたがひ他力をたのみまいらすることろかけて、邊地の生をうけんこともとなげさおもひたまふべきことなり。  
とある處である。口では願力を頼み奉る、不思議にましますと言ひつゝも、心では矢張り善からん者をこそ助け給はんづれと思つて居る。夫だから何時迄も苦みがさらぬのである。

又  
學問せばいよ／＼如來の御本意をしり、悲願の廣大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかゞなんどいあやぶまん人にも、本願には善惡淨穢なきおもむきをもとさかせられさふらはゞこそ學生の甲斐にてもさならはめ。

善惡淨穢の無い本願であるといふ茲を頂かねばならぬ。善惡淨穢の有る本願なら我々が救はれる筈は無いのである。茲を教えてこそ學生たる身の甲斐も有るのである。斯く頂くと私初めが此の人生に立つ上に於て、此の廣大なる恵みの中に居ると思ふと、善い悪いの人の善惡、自分の善惡を言ふのでは無い。善惡淨穢に係はらぬ本願である、此の罪深き私人に向はせらるゝ慈悲である承はると、彌々自分の罪深き事を懺悔する外は無いのである。去りながら自分の罪深き事を懺悔すると、こんな事では仕様が無いと思ふのでは無い。

わろからんにつけてもいよゝ願力をあふぎまいらせば自然のことはりにて柔和忍辱のこゝろもいてくべし。である。此方が悪ければ悪い程彌々本願が高い／＼うづ高い。夫丈け此方が下の下のどん底迄解らせて貰へるのである。陛下が地震で難儀して居る者をと使ひを下された。其陛下の思召が解れば解る程、此方の淺間しき事が身に知れるのである。夫丈け彌々陛下の思召のうづ高い事が猶ほ頂けるのである。或はこんな田舎へ来て下されて恐入る、昔ならば滅多にこんな處へお出下さる御使ひては無い、夫に今はかゝる破屋へ迄お出下さる、昔は夫々の役人が有つて扱ふたものが、今はこんな草深い所へ迄来て下さるといふかも知れぬ。去りながら遠い處からと思ふのが高い所以ては無い。直き／＼にお傍の人を遣はして、恰も面接するが如く近くお訪ね下さるのである。其の近き思召を頂くと、我々百姓一人々々を夫程迄に哀れみ下さるお意が、益す／＼高い／＼うづ高い、

である。又其の聞くといふのも、聞くといふは衆生佛願の生起本末を聞き疑心有ること無し。之を聞くといふ。

此の本願の親心を聞かせて貰ふのである。又本願力に遇ひぬれば、むなしくする人ぞなき、功德の寶海みち／＼て、煩惱の濁水へだてなし。遇ふといふのも此の親心に遇ふのである。又清淨光明ならびなし 遇斯光のゆへなれば、

一切の業繫ものそりぬ、畢竟依を歸命せよ。光りに遇ふといふのも、此の親心に遇ふのである。解脱の光輪きはもなし、光觸かふるひとはみな、有無をはなるとのべたまふ、平等覺に歸命せよ。觸れるといふのも、此の親心の届いて下されたのが觸れたのである。

光明でらしてたへざれば、不斷光佛となつたり、聞光力のゆへなれば、心不斷にて往生す。光を聞くといふのも、此の大悲の親心を我々の心に聞かからである。もう斯く頂くと、頂き處は此の本願の親心唯一つ。心も言葉も絶え果て、如何にも誓願の不思議と頂く外は無いのであります。何が不思議であるか。不思議の不思議と解つたのが不思議である。誓願不思議、名號不思議、佛法不思議、いつゝの不思議をとくなくに、佛法不思議にしくぞなき、

佛法不思議といふことは、彌陀の弘誓になづけたり。何が不思議なのか。彌陀の弘誓が不思議なのである。彌陀の誓願不思議にたすけられ參らせて、往生をはとくへ

この我々にきつちり親しき所を頂かねばならぬのであります。動もすれば思召が高ければ高き程、此方が夫丈け善くならねばならぬやうに思ふのである。去りながら然うては無い。此方が悪ければ悪き程彌々お恵みが高いのである。お恵みが高ければ高き程、彌々此方に親しく来て下さるのである。茲を喜ばせて貰はねばならぬのである。聖人は『和讃』に宣はく、

十方微塵世界の 念佛の衆生をみそなはし、攝取してすてざれば、阿彌陀となづけたり。而して其者を攝取して捨て、下さらぬ。此の故に阿彌陀佛と申し奉るのである。

さて斯くの如く頂けば、我々は此の本願に遇はせて貰うた、是程有難い事は無いのである。我々は超世無上の本願である、光明中の極尊である、無上法皇の阿彌陀如來である承はれば、聖人がさう言はれたのである位に思つて居るのであるが、中々夫れ處ては無い。聖人は晩年になればなる程、彌々強いことを言つてお出になるのである。『文類聚抄』には宣はく、諸佛の教意をうかゞうに、三世の諸如來出世の正しき本意は、唯阿彌陀不可思議願を説かんとなり。

釋尊一代の教説も此の爲めである。三世の諸佛の來られたも此の爲である。此の親有る事を知らず以外に無いのである。其の親に遇うといふも、別に變はりたる事が有るのでは無い。其の如來の親心を聞くなり、信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起す。

しと信じて念佛まふさんとおもひたつ心のおこるとき攝取不捨の利益にあづけしめ給ふなり。向ふの不思議で此方が助けられ參らされるのである。斯く頂くと、もう此の上に言葉の附けて見様が無い。誓願をはなれたる名號も候はず、名號をはなれたる誓願も候はず、かく申候もはからひにて候なり。(乃至)たゞ不思議と信じつるうへはとかくの御はからひあるべからず候なり。

誠に心も言葉も絶え果てたる是ぞ無上法皇の思召と頂く外は無いのであります。(十一月二十一日)

●佛敎辭典 浩々洞編

今度浩々洞の諸師が幾多の苦心と努力を費して編纂せられたる佛敎辭典である。元來佛敎界に適當の辭書無き爲め、佛敎研究者の困つて居た事は非常なものであつたが、此の際率先して世に顯はれたものが本書である。本書の爲めに幾多の人が佛敎研究の端緒を得るか、想像に余るのである。殊に辭書の編纂が世人の想像以上の難事業である丈、斯く成功せられる迄の苦心が察せらるゝのである。凡例に於て佛敎に關する學問語、普通語、並に高僧、寺院、經籍、地名等凡そ約二萬語を收載してあるさうである。吾人の一見した處で第一に感ずるのは、其一語々々の解釋が、如何にも平易簡明に而も遺憾なく要を盡してある事である。これなら何人でも直に要旨を得られ、吾人の保証する處である。殊に初學者及學生には最も好適であらうと思はれる。形も縮刷書海位で、印刷も極めて鮮明に、氣持よく出来てゐる。頁數も約千七百頁程ある。吾人は切に一本を讀者にすゝめ參らす者である。(定信武圓、發行所 東京無我山房)

聖 傳

ヂヤータカ釋尊傳

第三十五 出し抜かれし酷き鶴

「悪漢いかで敏くとも」此は世尊ヂエタバナに於て裁縫師たりし僧に就きて語りたまひしところなり。

嘗てヂエタバナに裁縫の巧なる僧住みけり。彼は布を裁つ事より程よく形をとりて縫ふ事など一並ならず腕さえたり。

此才により彼は常に衣服を作るに心を籠めしかば遂に裁縫師として名をあらはしぬ。

今彼の常に爲す様は或る古き布片もて柔かき肌心地よき衣を作るなりき。一度彼古き布を取りてそを染め貝殻もて摩擦する時は、さながら新らしきものゝ如く光りて人の目を引きぬ。針もつ事知らぬ僧等新らしき衣作らんとて彼を頼めば、彼は曰く、

「兄弟よ、新らしく衣を裁縫するにはよほどの時を要すべし、幸ひこゝに出来上りたる不用の品あれば、汝は此衣をとりて其布はこゝにのこし給ふべし。」

とておのれの作りあげし衣をば取出して彼等に示しぬ。彼等はその衣の如何にも色麗はしきに欺かれて、古きものとは夢にもしらず、彼等の新しきものと交換したり。

今は昔、菩薩嘗て蓮池に近き樹の神の生をうけ、森の生活をなし給ひぬ。

早の時水はあまり大ならざる池に僅かにのみ流れぬ。此池には多くの魚住みけり。

こゝに一羽の鶴ありき。或時魚の遊泳するを見ておもへる様、

「我はとかくして此等の魚を欺むき餌となしくれん」とて、水ぎは近く下り行きて座し、頻りに策をめぐらしぬ。

魚は彼を見て問へり、「汝は呆然として其處に何をか爲す」「我は汝の事を案じ居るなり」と彼は答へぬ。

「オ、君よ汝は我等に就きて何事をか案じ給ふ」と魚等は審しめぬ。

「何故なれば、此池には甚だ水少なし、汝等の爲に食も少し、太陽はますます照る、されば我汝等が行末如何に成るならんと案ずる也」

「實に然り、君よ、我等は何とすべし」と彼等は曰ひぬ。

「若し汝我のいふがまゝに爲すならば、我は汝を或美しき大なる池に我嘴にて運ぶべし、其池はさまざまの蓮の花にて掩はる、其中に汝を放つべし」と鶴は答へぬ。

「鶴が魚の爲に心配するてふ事は、此世始まりてよりこのかた未だ聞かざるところ、そは、必らずや汝の目的は我等を順次に喰はんとするべし」

「否々、汝等我を信する上はいかで汝等を害すべし、されど若し汝危ぶむならば汝等の中一尾をして我と行き見せしめよ」かくて彼等は漸く鶴の言を信じ、一疋をえりて彼に渡しぬ。

されど其衣や、汚れし時、僧等は湯に入れて洗ひしに始めの光澤も色もなく、全く古きものとなりしかば、其處此處に繼のあとさへ見え初めぬ。されど後悔するには遅かりき。かくて彼は古衣を賣り附くるこすき僧として誰一人しらぬものなきに到りぬ。

此時或田舎に裁縫師ありて恰も前者と同じき手段もて人を欺むししが、一日よとヂエタバナにかくの如き僧あるよしを聞きぬ。いかで彼を陥し入れんものと彼は古き布もて麗はしき衣を作り、よき赤色に染め、これを著してヂエタバナへ行きぬ。彼僧此衣の餘りに美麗なるに心をひかされて曰く、

「君よ、此衣は汝の作りしものなるか」

「然り君よ」と答へぬ。

「君よ我に其を與へずや、汝は其替りに他の品をとるべし」と云ひぬ。

「されどわれら田舎の僧はいと貧しく暮せり、此を汝に與へなば、何をか著ん」

「我は或新調の衣を持つ故にこれをとられよ」

「よし、こは我の手づから縫ひしもの、——然し汝其の如くいはるれば、いかにかすべき。さらばとり給へ」とて彼に古き衣を與へて新衣をとり凱歌を奏して引上げたり。

ヂエタバナの僧は衣を著けぬ。數日經てこれを洗濯せしむ、此は全く繼縫にて作れるものと知られ痛恨に胸を焼きけり。此噂忽ち立ちて喧ましく僧等は談笑したり。遂に世尊も聞き給ひ、「今世のみならず、前世も彼はかくの如く報らるれぬ」とて次の譚をときたまへり。

その一尾は形大きく片眼失なへる者、彼等が水陸共に如何なる場合にも強しと見込みて送れるなりき。

鶴は彼をとりて池に行きすべてを見せしめ、又つれかへりて元の魚の群にかへしぬ。此魚はちのが見たる池のよき事を仲間ほめぬ。

彼等これをきし時、叫びて曰く、「よし、君よ汝は我等を連れ給ふべし」と。

時に鶴はしすましたりと彼の片眼の魚を第一に取りバラナ樹美しく繁る堤へと伴ひ、忽ち樹の幹に彼を投げつけぬ。嘴もてこれをつつき殺し彼は其肉を喰ひ、骨を樹の根に残して再びかへり、呼びて曰く、

「我は彼を投げ入れぬ、いざ他の者來れ」と。

かくの如く、彼は總ての魚を運びて悉く喰ひ、残れるものはたゞ一疋の蟹のみなりき。鶴は此蟹をも喰ひくれんと呼び出して曰く、

「我は總ての魚を悉く他の大なる池に運びつくしぬ、來れ、我は汝をも連れ行かん」

「然し汝は如何にして我を運ぶや」

「我は嘴にて運ぶべし」

「汝その如くせば我は地に落ちん、我は汝と行く事を止めん」

「恐るゝ勿れ、我は汝をしかと運ばん」蟹つら／＼觀する様、「此奴若し魚を運ぶと云ひて悉く喰ひしにあらざるか、今若し彼れ我を運びて池に入るれば占めたり、萬一さなき時は……よし我彼の喉を切りて殺すべし」

とて  
「此處を見よ、友よ、汝は我を運ぶ能はずとも我等蟹には有  
名なる缺あり、若し汝我をして手にて汝の頸をつかましめば、  
我喜びて汝と共に行かん、」  
鶴は深き巧あるともしらて同意しぬ。かくて蟹は他の長頸  
にすぎり、鍛冶屋の火著の如き缺を合しぬ。

鶴は池の岸に行きても下りんとせず、つとバラナ樹の方へ  
足をむけしかば、蟹は叫びぬ。叔父よ、池はこゝならずや、な  
ど道をかわずや」  
「オ、然り、汝の叔父とも汝の愛しき姪とも我をよぶべし、  
汝は我を奴隸の如く汝等を運ぶ愚者とおもへるらし、見よ此  
樹の根にうづ高き骨を！この如く、我は汝を喰はんとするな  
り、」

「ア、此等の魚はおのが愚昧より殺さる、」と蟹は答へぬ。「さ  
れど我は汝をして喰はしめざるなり、反對に我こそ汝を滅ぼ  
さん、汝愚者よ、汝は我が策略にかゝれり、もし我等死なば  
共に死すべし、いざ我汝の此首を地に切り捨てん」と云ひつ  
い、おのが缺もて頸をしめぬ。

鶴はあえぎつゝ涙は眼よりほとばしり恐怖にふるへて歎願  
しぬ。「オ、我主よ！實に我は汝を喰はん心とはなかりし、  
我命だけは救ひたまへ。」と

「よし、池に下り其中に我を入るべし」  
鶴は忽ち身をかはし、池に下りて其岸の泥の上におきぬ。  
されど蟹は彼の喉を恰かも小刀にて蓮の莖を切る如く断ち水  
中に入りけり。

時にバラナ樹に住める神は世にも不思議の出来事に歌を唱  
して森をにぎはしぬ。  
悪漢いかに敏くとも  
悪のさかゆる事あらじ、  
欺き勝ちし鶴は亦  
賢き蟹に殺されぬ。

世尊此譚を終りたまひし時因縁を結びて曰く、「其時の鶴は  
ジエタバナの裁縫師、蟹は田舎の裁縫師、而して樹の神は我  
身これなり」と。

### よろこびの跡

十二月十五日頃  
出来の豫定

右は本誌前號及本號告白欄に其の一部を掲載せる故菅瀨  
令夫人の日記全部を輯録せられたるものにして、今回紀  
念の爲め印刷して知人間に分たるゝ等に候。就きては有  
縁の方々には此際弘く配分致し度き御希望に付、有志の  
諸君は實費一冊十八錢郵税紙錢（十部以上割引）相添え  
御申込相成り度く、最も夫人の日記が信仰より來る實生  
活其他の告白なる事は、既に本誌にて御承知の通りに候。  
若し全部を通讀せられ候はゞ、如何ばかり難有き事なら  
んと存候。右謹告候也。

申込所 本郷區東片町 同和學園  
御都合により弊所に於て御取次可致候  
求道發行所

### 告白

### 故菅瀨夫人の日記

（前號に續く）

明治四十二年

○二月六日 此日は先づ朝より御慈悲に遠ざかりて居り  
たが、いつしか御影で本心否佛心に立ち返るのである。晝  
食後深く裁縫をして居りて感じました。先づ蓮如様は御佛前  
に衣服を御備へ遊ばして御召しになりましたとか。自分も信心決  
定の人のまねをすべしとの仰せなり。故に先づ裁ちたる儘を  
佛前に御備へして御法を喜びたのである。南無阿彌陀佛。

○十三日 今日晝頃風呂に行きてかへり、先づ家事を  
なす。夕景より下女の吾に向ひておもしろからざる顔をなす。  
自分の心は依然として動かないて信仰の彼れになき事を悲む  
のみ。夜深くなりて藤本氏と種々の御話をいたしたれども、  
決して心は本心否佛心より立にげないのである。南無阿彌陀  
佛。主人は此夜半迄の方に法語に行かれた。佐々木氏と共に  
嗚呼全く信仰がなければ駄目であると思ふて、自分の仕合

せを喜ばしていたといふ。南無阿彌陀佛。自分は自分のなすべ  
き事に一生懸命盡さねばならぬ。又た此夜藤本氏の母上の七  
回忌にあたりた故に、皆團員たちは佛前に參詣なされたので、  
自分もうれしくて御禮をいたしたのである。嗚呼兎に角佛陀  
の慈悲より遠ざからぬ様感謝して日暮しいたす事此上もな  
き事である。南無阿彌陀佛。々々々。

○十四日 日曜日なる爲め求道學舎に參詣いたし、今日  
の題は障得なしと云ふ題でありました。嗚呼誠に有難く拜聴  
いたしました。まあほんとうに自分達は朝から晩まで罪のみ  
作りて居て、併もよき事をなして居る如く思ふて居る。全くあ  
さましき物であります。又トルストイ先生の無抵抗なる字を  
以て示された御話もありました。嗚呼全く吾々は人生に處す  
る上に於て、佛の御恵みを感じないものは何等の意味もない。  
何程社會に出て、人生的にいへば社會の一人として仕事をな  
したとて、能く考ふれば何のとする所なし。罪を作り終り  
たるのみ。全く人生に生れ一人前になる迄の御佛の御手廻し、  
如何にありがたく勿體なく感じて可なるや。云ふに言葉なし、  
書するに筆に及ばず。唯だ感謝の意味あるのみ。南無阿彌陀  
佛。

○十六日 全く二河白道の御例への通り、自分の心はし  
てみようがない。嗚呼心はいつも感謝でなく却て不平のみ。  
誠に勿體なやの極みにあらずや。嗚呼人生佛の御恵みなくて  
は斯様に安心して日暮する事は出来ないのみならず、私共は  
身體は至て丈夫でもあるし、如何にも喜ばねばならぬに、却  
て不足にのみ思ひ居ること實に残念の至りてあります。自分

程の仕合せ者はないと云ふ事を能く承知しながら、不足に思ふて居るところはづかしけれ。二河白道の御例への如く全く、してみようがない。嗚呼誠に人生佛を見ないで日暮しする人こそ不幸の人と云ふべけれ。口には南無阿彌陀佛を稱へながら淺間敷日暮し。慚愧に堪へません、南無阿彌陀佛。

○十九日 今朝近角先生の御許に御伺ひいたして、「祖師は番子の九十年」と云ふ俳句について御尋ねいたした。ところが番子とは御粗末と云ふ意味にて、別に紙衣を御召しになりたわけても無いと思ひます。併し今より考ふれば其當時の御有様は思ひ知る事は難しと、種々御話しになりました。誠に有難く拜聴いたしました。丁度丸茂様の奥様がいらせられて大變都合がよくございました。かへりてぐづ／＼して居りたら加賀美様が訪ふて下された故に、故郷の話に餘念なく面白く御話しいたしました。兎に角信仰上につきては別に變りありません。併しふりかへりて見れば誠に喜ばず居られないのであります。今夜夕食の御話に、人たる者は學問しなれば行かないとか種々聞きますと御なかの中が堪へられないやうな氣持がして、自分のつまらない事が残念でたまりません。併しながらあながちに學問があるのが仕合ともゆかないのである。併し自分は藝のないに甚だ困りて居りますよ。嗚呼今より一層進んで勉強してみたいと思ひます。島田先生の御話に「一息の存する學廢すべしにあらざらん嗚呼私も悲觀するよりは一層進んで勉強したいと思ひます。南無阿彌陀佛。」

○三月六日 今日是非常に午前苦しくて、殆んど何事をなすのもいやになりて大變苦しくございました。と申す中

ていたゞいて今日病氣もなく、嗚呼思へば勿體なや。追々財政も豊かになり、自分が親より貰ふた身體は不具でもなく、其上種々考ふれば考ふる程全く御慈悲の厚い事をも、日誌かく下より「煩惱に眼させられて、攝取の光明見されども、大悲物うき事なくて、常に我身をてらすなり。嗚呼書けばさきも無いが全く自分の仕合せを喜ぶより外はない。島田先生の常に申された、人は常に自分の本分と云ふ事を忘れさせねば奇麗に世間を渡る事が出来る。嗚呼回顧せば三年の古は煩悶の淵に沈みたる忠子も、今日は御影で信仰に入らしていたゞいて勿體なや。あびる湯も呑む茶もかむる着る衣服も彌陀の骨髄、祖師のしゝむら。」

○十四日 近角奥様より御手紙頂戴いたし御伺ひいたした。丁度丸茂奥様もいらせられて居まして、種々御話を伺ふて歸りました。午前はすつかり近角様で御邪魔いたしてかへりた。午後は丁度來客にて御相手いたした。此夜主人は神戸福間様に伺ふ爲め、他より歸り次第支度をいたして九時頃には宅を出た。あとに残りた私は何となく淋しく妙な氣持で居りました。併し他には別に變りはなかつた。私は此夜は何んだか自分の日誌を求道に出さんと思ふてそれが氣にかゝりて氣分もあちつかなかつたのである。此夜は別に御慈悲も激くは喜ばれず、只だ佛前に御禮をなして床に入りぬ。併し一日無事にて日を過したる事を仕合と思ふ。南無阿彌陀佛。

○十五日 朝より又た近角様に伺つた。奥様と種々御話をいたして又た午前は近角様で時間を費したたのである。自分

食の御菜などを心配し、非常に苦しくてなんともしてみようがなかつた時、御念佛を稱へても非常に苦しい。其時後に思ふた。嗚呼全く腹なり、蛇なりと。嗚呼全くなんともしてみようがないこと。實に「さんけんのじばくするが如し」全くあれこれと思ふて終に死なねばならぬ。其時は作つた罪で地獄に落ちて苦しまねばならぬ。嗚呼人間程賢らしく構へて馬鹿なものはない。人間死すれば萬事休すの言葉、全く能く其理を云ひあらはしたるものなり。人生全く悶えなればこそ如來様の御恵みに安心させて頂くのである。心配あればこそ悶あればこそと思ふと、心も安らかにあります。南無阿彌陀佛。

○七日 今日例會にまゐりて非常に有難く拜聴いたしました。此の日の講話は眞宗信徒の道徳觀念が薄いとて種々御話がありました中に、すべての惡をなす勿れ、すべての善をつとむべし、自ら心を淨むるは、これぞ諸佛の教なる。又た島田先生の常に御示し下されし、忠孝の道より外に道はなし佛の道もこれよりぞ入る。と示された。

此夜歸宅しても種々不足のみ云ふて居るのみならず、佛様の方に脊を向けて居りましたと、またも頭を垂れて懺悔の形をなし、又しても／＼不足。嗚呼全くしてみようがない。人様の身上を考へては羨しいとか、又は種々考へてのみ居ります。これ全く身體も丈夫なる爲なり。島田先生の御言葉「治まれる御代こそ仰げ九重の今宵の目を見るにつけても」、全く其通り自分は常に不足を思ひて居る。嗚呼思へば不足に思ふてなんとしよう。現に此如來の御慈悲なくば日誌をかく紙すらないものを、哀れ御慈悲のなされ業や。有難き法をさかせ

た目的を達して出すと仰せられて下され、安心して何だかうれしく又たいよ／＼約束いたして歸りました。先づ午前はそれにて時間を費し、午後は早速日誌を用紙に認めかけた。先づ初めの一枚はどうやら記した。其内來客などありて中途にて筆を止めたりなどいたしたものの故に、遂に氣分も抜けて何んだかいやになりました。併し又た自分は飽きて書かんと思ふて筆をとりたが、なか／＼むつかしい。種々俗語も交りて居るし、言葉づかひもわからず、何だか苦しくてたまらない。時も過ぎて夕景になりました。とうとう考へて居りたが考へた結果遂に決心いたしました。明日は御断りにあがる事に決心いたしました。何だか如來様の御慈悲を喜びたのと、自分の境遇を喜びたのと、目茶苦茶になりて居るから、兎に角雜誌の紙上をよごすも面目ないから明日は宜敷御断り申上んと思ふた。只だ自分は一人でも如來様の御慈悲を喜ぶ度を多くし、縁をつくられん人も一人にても多くならん事を望んで記さんと思ひました。兎に角後にゆづりてと思ひます。御慈悲を喜ぶとてまた人様に御話いたす程の喜ばなし。全く慚愧に堪へません。南無阿彌陀佛。

○十六日 何だか今日は近角奥様にすまぬやうな氣持がして終日氣に懸りました。夕景求道學舎に伺つて奥様に御断り申上げたら、別に悪しき御顔もなさらず御うけとりになりました。何だかうれしく思ひました。此夜は別に變りなく、只だ御慈悲も喜ばず、何だか此頃子供を一人望む爲め佛前へ御禮いたしてもあち／＼ともいたさず勿體なきの限りなり。嗚呼やはり日曜には求道學舎にゆき、又た夜は佛前へと御禮

いたさなければ行けないと思ひます。どうも御慈悲より遠ざかりてゐます。勿體なきの限りなり。南無阿彌陀佛。

○十八日 此日は朝より仕事に餘念なかつたのである。此夜は床に入りて自分は全く二十三年生かしていた。

いつ迄生きる身の上を、自分は仕合ものである。思へば命がされれば此儘極樂に往生するのだと思ふと、全く御稱名はたへないのである。其まゝ眠りにさそはれてしまつたのである。此夜は何となく頻りに御念佛が稱へたくてならなかつたのである。又其内に、もういやになりて、全くして見やうのない私である。近頃は御法話も拜聴せまいし、全く大やうになりて居ます。愧かしき限りよ。併し只だ人生的の事なれども、もう嬉しいやうな氣持がする。外の事でもない、先日來子供がなくて何だか良人にすまぬやうな氣持がして居たが、なんだが出來たやうで、もなんとなく嬉しいうやうな氣持で日を暮して居ます。此れにつけても子を思ふは非常のものである。まだ胎内にやどらない前から彼れ是れと心配いたして居る。而していよ／＼子供となると、一層心配もいたし慈悲も垂れるのである。是れにつけても佛の衆生を御恵み下さる事は非常なものであらう。衆生は佛に御依頼しないのに佛は哀れんで下さる。子は母にたのまねど母は子を愛する。全く佛の衆生を御恵み下さる事の有難さに南無阿彌陀佛。

○二十一日 彼岸の中日に何だか古郷がしたはしくてたまらなかつたのである。此の日は園員などに萩の餅など作り上げて、先づ佛前に御備へして、次に自分も頃戴いたしたのである。過ぎし昔に振りかへりて彼岸を考ふれば、随分

恩返しせないと居られませう。メイドなども歸れば歸りてもよい。自分は昨今の日暮しの仕方よりは、却て臺所奉行となる方が自分には適當であると、心は猶更動かないのである。日本女學校卒業生、校長の御熱心なる御話を伺ひし身を以て、世間に恥づべき所業をなされやうか。なす事は出來ないと思ふたのである。嗚呼思ふに自分の人格は先づ御佛よりの御導きには違ひないが、併し先づ同和學園の御蔭、日本女學校の御蔭、求道學舎の近角先生の御講話など拜聴などした御蔭と深く感謝いたします。日誌を認めつゝ、氣づいたは、今日はずつかりと日暮いたしたが、思へば法然上人の御誕生あそばし、た日とて、一層御佛の常に御守り下さる事と思ふて、いよ／＼御慈悲が有難い。若し夕景斯様な事なかりしならば、此夜は日誌も認めず裁縫位にて過せしものを、今晩の出來事より雜誌拜見いたす事と決して此の夜の時間過す積りなり。餘り感じたるため長くも記しおくなり。

○十六日 日中は不足のみ思ふておはりました。けれども有難き事には夕影佛敎唱歌を詠ひ出して、ふと御慈悲に立ちかへらして頂いて大變有難く喜ばして頂きました。其内には全體今晩着て寝る蒲團もなく、又今晩頂く食物もなく、又た今晩やすむ家もなければ、それは斯様に泣ねばならぬかも知れぬが、左様ではないので皆な立派に具て在るのである。それに泣くのは全く御佛に脊を向けて居るからと、立ちかへらして頂いたのである。嗚呼有難い勿體ない事。なんともしてみようがないこと。大變涙を流してあらん限りの御文を稱へて喜ばしていただきました。南無阿彌陀佛。

熱い涙で一日を過した事もある。嗚呼たのもしの今年の春やと。それにつけても我身の仕合を喜ぶわけて感謝いたします。南無阿彌陀佛。

○四月五日 人間は本當にひまてはいかない。全く煩惱にのみさえられて居る。淺間敷限りよ。併し後に御慈悲にたちもどれども一たんはぐ／＼して居る。悲しき事の限りよ。嗚呼人生全く思ふ様にゆかないので、殆んど困るのである。併しなから能く／＼考へて見ればたのもしき世の中よ。到處に御慈悲は満ち／＼て在らせらるゝ。嗚呼全く御慈悲と共に日暮しいたしたき限りよ。南無阿彌陀佛。

○七日 此日午前は別に事もなく暮したが、午後下田先生の所へ御伺ひいたしました。それも何んだか伺ひたくなかつたが、萬感を打すて、御伺ひいたしたが、誠に有難く御講釋を御伺ひいたして、いそ／＼と歸宅いたしたのである。然るに歸宅早々面白からざる事があつた。例の痲癩を出して自分は大に怒りて大變面白くなかつた。けれども自分では少し考へたのである。ついでには其結果が目の前に顯はれて居るが、私は決して迷はないのである。依然として心は動かないのである。其時は種々に頭に浮んだ。近角先生の三つ子を相手にするな、三つ子相手にしたと何の得る所はない、却て自分も煩惱に苦しむばかりであると思ふと、尙信仰得させて頂いた御影で心は安らかである。其時は随分立腹せざるを得ない所業もありました。私は彼等人間を三つ子と思ふて居るから、決して人間を相手にしないのである。又思ふたのは吾こそは日本女學校卒業生、遺書に記しある校長の御恩、何として御

○二十八日 下田先生の所へ御伺ひしようと思ふて午前には少々勉強いたしました。午後幸にして御伺ひいたしました。歸宅して後でも何んだか煩悶して、あれこれと心配てたまらなかつたのである。幾度となくため息をついて嗚呼心だど胸に充滿する苦しい／＼が胸に餘りて、全くしてみようがない程苦しい。なれども如何にいたすも苦しく、先づ手になにかをいたさんと思ふて少々用を初めた。其内には少しは心配を忘れて居た。夜に入りて何だか胸が一ぱいて苦しい／＼。全くしてみようがない。もはやとても私は學園の生活は出來ない。私は最早學園の生活は出來ない。私のやうないくぢなしは、學園の生活は出來ないから、自分はいつまでも斯様に苦しくてはともやりきれないから、病氣の元になるから、自分は何か考へなければならぬ。目前斯様に苦しくてはとも自分には心捧が出來ないと、これからあれ／＼、あれからこれへと胸はふさがりてしまふ。それもせめて十日に一度か二日に一度の煩悶ならまだしも左様ではないが、日には三たび食事のたび毎に心配だ。嗚呼精神的に自分は命がちぢまるから、早くなんとか方法をとりたいたい、あけくれ思ふて苦しき餘り御念佛もあまり出ない始末である。目前此様に心配ては、とても自分にはやりきれないから、イツン、イツン、イツン、イツン、信仰もなかつたらば自分の思ふが儘にと、人目を忍びて熱き涙／＼。如來に前世からの約束事と云ひながら、あんまりだと、又た煩悶／＼。なんともしてみようがない。苦しいとも／＼。併し能く考へてみよ、物有本末、事有終始、知所「光後」則近「道矣」南無阿彌陀佛の御稱名は出ない。併



し今日が今生の御暇乞ひか今宵かと思へば、今しばしの辛捧「花の都に至るには、御法一つを菊の花」口くせに稱へてよろこべや。南無阿彌陀佛。

○五月二日 日曜日であり、しかも母の命日で、しかも求道學舎に參るべく機はまわりて、大變有難く拜聴いたした。全くしてみやうのない程煩惱々々で仕方がない。全く先日伺つた心の病が重いので、此世の事に執着して居る。誠に愧かしき限りよ。自分は常に自分の不幸を考へて居る。けれども昨日「警世」を拜見して居る内、小楠公の和歌を見出したのである。「とても世にながらふべくもあらぬ身のかりのちぎりをいかで結ばん」常に自分は子供のなきを煩悶して居るから此歌を思ひ出して慰めんとて記しおくなり。全く此世はいやな浮世と知りながら、やはり昔の昔の其昔より迷ひ迷ひて今迄迷ひ、未だ、現に迷ひて居る。無明業障とて恐ろしき病にとりかゝりて、親様はあはれと御覽下されて、今已に人間界に居る間に御法を聞かさんとて御慈悲より私をこゝまで御導き下された。昨日先生の御話も衆生佛にならずば我も正覺をとらじとの仰せ、誠に有難き事。此女人を目かけて親様は御慈悲をたれて下さるとは、嗚呼有難い。南無阿彌陀佛。

○三日 廣島は随分名を打た真宗御繁昌の地であります。先日利井氏の御話を聞くと、如何にも餘り宜敷ないと。却て物だくさんに思ふて法を輕々しくしてならぬ。其邊から云ふと東京の方が説く人も聴く人も眞面目でよろしいと思ふ。自分は全く善き所に來たものだ。全國いづこにか斯様なる所があらう。居は氣をうつすから誠に結構なる所に住ま

つさぬ樂み得させて頂かんと思へば、暫時の世の中は勘忍しないてなんとしよう。私共は斯様に宗教家の妻となり、明け暮れ御慈悲の御話しを伺つてゐるのに、やはり以前と變らぬのである。南無阿彌陀佛。

○四日 時々斯様な事がなくてはいけない、誠に自分にとりては此事はよいのであるか、一寸胸につまりて何ともしてみようがない程苦しい。丁度此日は有難い事には御慈悲をとり出して喜ばしていただいたのである。去年の此頃の事ども有り／＼と眼前にうかびて、何んとも云へなく苦しみました。泣いて居るところへ伊木氏學園へ寄附せられた金が入りた。嗚呼誠に有難い。彼の心持を思へば此寄附を無駄に受けてすみましようかと、深く感謝いたして今より佛前に御目にかけて、先づ自分が御頂いたして貯金いたす事に決定いたしましたのである。有難い。南無阿彌陀佛。

○五日 世の中に誠に氣つけねばならぬは世諦の事。其上に又氣をつけねばならぬは御法の信心獲得する事。相成るべくならば御縁を作りて御慈悲を喜ばねば相すまい。とても世にながらうべくもあらぬ身のかりのちぎりをいかで結ばん。

○六日 今朝珍らしき事があった。外でもないメイドが懺悔して來たことである。自分は常に斯く思ふたのである。若し「かね」が方て前の様に立腹して出づれば、此方にてはやはり立腹してしまふ。左様すれば生涯面白くなるのである。けれども、斯様に向ふから折れて來れば又此方も折れて來る。人情とは凡て斯様なもので、檀那樣とも斯く御話いたした次第である。若し「かね」が斯様に自分たちを頼んで來るならば、

ていたたくと感謝を堪へないのである。併し決して常に満足してはゐない。何時も不足々々で暮して居るのである。時には行くもいやかへるもいや、甚しくは死ぬもいや死なぬもいやと思ふて、煩惱にのみほだされて居るのである。誠に淺間しき限りよ、耻しき限りよと思ひ思ひて思ひ餘り、遂に御佛の御慈悲に立ちかへるのである。今現に下女が日記かく最中自分に反對する。一寸腹が立つて仕方がないが、彼は下女だ、三つ子だ。迷ひ迷ひて今現に迷ひ居る。夢を見てゐる者だから、相手にするに及ばぬ。併しむねをかき破ぶるやうなが勘忍しなればならぬ。嗚呼自分の心はしてみやうのない様なあさましき者であるが、此苦しきも學園がある故なりと思へば、其苦しきは幾分減ずるのであるが、嗚呼々々。日には三度五度ではない、終日苦んで居るのである。けれども御慈悲になぐさめられて自分は生きてある。若し御慈悲がなかつたならばもはや余程前に死んだかもしれぬと思ふが、いや／＼ならぬ勘忍することを念佛行者の勤めだと思ふて、日々の辛棒をして日夜に淨土の道中をしてゐるのである。戀しくは南無阿彌陀佛を稱ふべし吾も六字の中にこそすめ「たは」形見には南無阿彌陀佛を殘しをくならん後は誰も用ひよ」ともはや御助にあづかり光明攝取の身とならして頂いた身の上は、並ては耻かしい。人よりはさつと違つて居なくてはならないと思ふ。「夢の世に夢とも知らずゆめを見て夢より夢にうつる夢の世」長の迷の其の内より考ふれば、人間の壽命は只一旦の浮生なり、只一時の浮生なり、ならぬ勘忍すること念佛行者の務めなると、齒を喰ひしげりて、やがて淨土の蓮の上

私等も又責任を以て彼の世話なす事と思ふ。自分等が責任を以て「かね」を縁づけてやりたいと思ふ。否自分達の子孫に至るまでも「かね」といふてなつかしくいふであらう。自分とても此度の如く彼が立腹して出づれば、たとひ帯の片側も買ふて遣らんと思ふて居ても帶しめ位ですましておかんと思ふ。或は何にもやらぬ。それはなべての人の情である。これ一般の人情である。故に自分は誓つておく。彼女を本當に可なりの處へ縁付けてやりたいと思ふ。自分はたとひ犠牲となりても彼女に前掛の一つも多く買つてやりたいと思ふ。然し斯く出づるは彼の最もえらいところである。若し前の様の如くで退園すれば彼が留守中學園に盡してくれた功も水泡となりてしまふ。彼女はあつばれ賢き女と思ふ。ひとへに御佛の御蔭と思ひます。南無阿彌陀佛。

○七日 嗚呼どうも腹がちさされる程つらい。自分と我身で苦んで居る。自分には常に上のみ思ふて居るから斯様に不足が起るのであらふと思ふ。併し心配だ。斯様に心配が多い世の中だから、如來様はかはいと思召たのであらう。全く今日は氣樂だと思ふ氣分の休まる日は殆んどない。いつも不足のみ思ふて居る。併しいつも立ちかへるのである。けれどもどうも煩惱の手づよくてやりきれない。去年の今日は父母上様の年回を勤めた日であると思ふと、全く去年がなづかしく思ふ。併し母上の病氣にて困りて居られたのが全く辛らう。遂に今月末には死なれた。否極樂に往生いたされた。此世は今暫時「夢の世に夢とも知らず夢を見て夢より夢に移る夢の世」とも世にながらうべくもあらぬ身のかりのちぎりをい

かて結ばん」どうも此の世の中に居る間は安心する事は出来  
ない。早く本國に歸らねばならぬ。自分には今旅行中だから  
早く本國にかへりたい。嗚呼日記を書くところ御稱名が南無  
阿彌陀佛。御和讃には「小慈小悲もなき身に、有情利益は  
もふまじ、如來の願船いままさずば、苦海をいかでか渡るべき。」  
「超世の悲願さしより、吾等は生死の凡夫かは、有漏の穢心  
はかはらねど、心は淨土にすみ遊ぶ」と「悪性更にやめ難し、心  
は蛇蝎の如くにて、衆善も雜毒なる故に、こけの行とを名け  
たる。」佛になる身は心せよ道の道。

○十一日 朝六時頃學園を出掛けて上野驛につきたが、  
途中も又着驛後も煩悶のみいたして大變胸が苦しかつたので  
ある。西本氏も其内見へたから汽車に乗込んだ。其間西本氏  
など種々御話も初まり雜誌など拜見して居たら、大分煩悩  
が薄らぎたのである。而して後汽車の進行するのをながめて  
御開山上人の御事を思はして頂いた。昔は汽車もなかつたて  
あらふ。又現に自分は着物がなかとぼして居るが、上人は  
絹の召物はなさらなかつたてあらふ。然るを今は粗末にせよ  
絹を着せてもらふて、且つ汽車に乗りて何と仕合者であらふ  
と感謝いたしたのである。「勿體なや祖師は昏子の九十年」思  
ひ出して涙をこぼす。時は經て稻田禪坊に參詣いたした。寺  
の門前に水が流れてをる。其川には小さい橋がかゝりてをつ  
た。(みかへり橋)と名けるそうなる。又御寺の庭には櫻木があ  
りたのである。其櫻木の處にて辨圓が懺悔したのである。此  
日殊にうれしき事は母様の玉日宮様の御眞影を拜觀いたした  
のと、御寺の御住職様が申されるには、あなた方は此迄は片

親ばかりなつかしく思ふて居りたてであらうが、玉日宮様も御  
開山上人と御共に御苦勞下されたのであるから、宮様の御命  
日を忘れない様になされ。即ち九月十八日なり。かく承りて  
うれしかつた、難有く思ふた。勿體ないこれ迄は本當に知ら  
なかつたのである。それより宮様の御墓にまいりて一同「正  
信偈」を拜讀して香を焼き時をかたむきたるによりて、汽車  
にて福原迄行きて宿についたのである。此日深く感じたるは、  
禪坊の住職の申されし玉日の宮様を忘れ居りたる事、思ふも  
誠に勿體なき限りなり。あたりは只だ山と山のみにて人家を  
まれに見るのみなり。其間五人は只だ念佛相續いたして如  
何にも殊勝なり。形見には六字の御名を殘しおくなからん  
後は誰も用ひよ。戀しくは南無阿彌陀佛を稱ふべし我も六字  
の内にこそすめ「など心は一層動きたり。此夜もさかんに法  
義の話に餘念なく時を過した。思へばひとへにわれらが爲な  
りと感謝するみ。南無阿彌陀佛。

て、明日高田に參詣いたすべく相談の上下館にとまりた。此  
夜は法話會もなか／＼盛であつた。自分も随分しやべりたが、

明日高田に行くべき筈とてはやく床に入りた。

○十三日 朝早く床を出て高田に參詣いたしたいと、い  
よ／＼高田の専稱寺に參詣した。して見れば吾が後生はうた  
がはんとしても疑ひは起らないと深く感じた。種々の御不  
思議を伺つていよ／＼自分で計ふてなくて、只だ御稱名のみ  
すること吾身のつとめと思ふのである。火宅無常の世界はみ  
なもてそらごと、たはごとまことあることなし。吾等の心に  
浮びし事は皆斯様なり。南無阿彌陀佛。併し此度は御參詣出  
來たは只事ではない、必ず御開山上人より忠子を御導き下さ  
れて、善知識より善知識の御手に御あづけ下されて、三日間  
の御暇を下されたと思へば感謝するに言葉もなく、身は消ゆ  
る思ひするなり。嗚呼有がたい哉勿體ない哉と、深く感謝い  
たすところなり。只此上は何にも計らはず、御稱名相續が肝  
要なりと思ふ。南無阿彌陀佛。

○十七日 此日は朝より少し下痢を始めて何だか心苦し  
き爲め、田島様にゆきて御診察を頼んだ。午後に至りては少  
し重くなりたから床についた。床について暫時は眠りたが、  
暫くにして眼を覺して種々の考へに渡りた結果、御佛の御慈  
悲をとりだして喜ばしていたゞいのである。御念佛も何だか  
勵げまれて嬉しく感じました。夜に至りては非常に喜ばし  
ていたゞいた。又た種々と世事を考へて見るに、皆様から學  
園に對して厚意を以て向ふて下さるのを思ふて、大變有難く  
拜見したのである。兄上も大變自分の事については親切にし

て下さるから、自分だつてまんざら子供でもない。よりにき  
つと御恩がへしをなさなければならぬのである。

○十八日 南無阿彌陀佛。此日は前日より少し氣分があ  
しくありたる爲に、何だか氣がやすらかて大變喜ばしてい  
た。午前は主人と二人が語り合ひて御慈悲を喜びて、現  
在の自分等の境遇を喜びてゐました。其上何だか御念佛も出  
てきて、御念佛のみ稱へて居りた。すると御晝頃近角先生が  
御出て下された。嗚呼誠に御慈悲喜ぶ御利益は斯くもあるも  
のかと大變喜ばしていたゞいたのである。一時頃先生は御か  
へりになりましたが、寶閣氏の御令聞が見へて、大變信仰上  
について御話は深くなりたのである。嗚呼今日は全く有難い。  
吾本當の親友が二人も御訪ね下されたかと思ふと誠に有難い  
ので感謝いたします。其上此日は玉日の宮様の御命日にか  
けて明如上人の御命日で、一層有難く思ふ次第であります。何  
れにもせよ兎に角御慈悲を喜びてはいけなないと深く信ずる  
次第であります。南無阿彌陀佛。

○十九日 午前は洗濯をしながら斯く感じたのである。  
嗚呼忍耐しなればならない、自分等は已に諸佛菩薩が御守  
り下さる身、彼等は天王等が善と惡とを支配して、ちやんと  
記しなされる。彼等の身と天と地との違なれば忍耐しないてな  
んとしようと思ふ御念佛は續いて出るのである。南無阿彌陀佛。  
○二十日 此頃は朝からそうじて立腹しやすい。自分に  
はもはや人のなす事が腹が立つけれども、今日は御念佛の如  
何に利益のあるか試して見ようと思ふて、勿體なくも一方よ  
りは全く苦しき爲め、御稱名諸共に仕事をなしたら、餘り立

腹しないて終日たのしく仕事をしられた。廣大なる御念佛と深く感謝いたした次第である。南無阿彌陀佛。

○二十一日 御開山聖人の御誕生日なりし爲め、築地の本願寺の方に参詣いたしたが、計らず御演説など拜聴して誠に有がたかつた。自分が常に思ふて居る通り、矢張り世の中は信仰の上の日暮でなければいかないのである由を、事實に於て御話になりたのである。世の中は皆凡ての物に對して思寵の念を拂はなければならぬ事も、同時に説かれたのである。大變ゆかいに喜びて歸宅いたしたのである。又思ふ、全く人生は今暫くは美事に世を送らないては甚だ御佛に不忠の子となると思ふのである。萬事能く考へて佛法に志のあつた事をば世間に知らせたいと思ふのである。此日は種々話がありた中にも「顔は佛て心は鬼よ、うかとのられぬ口ぐるま」の歌。

○二十二日 先づ心靜に、世間的で申しても先づは樂てありたから、御稱名相續が出来たのである。然るところ午後には西本様より晝表を頂戴いたしましたに就きては思つた。嗚呼世の中の世渡りにも佛を信じないと立派に日暮する事は出来ぬ、まして未來の一大事となりては左様の次第であると思ふ。南無阿彌陀佛々々々。

○二十八日 地久節でもあるし、又自分等の菅瀬家に嫁した紀念日であるし、旁々以て種々の感に打たれた。かて、加へて郷里兄上よりの御手紙、一旦はうれしやと思ひました。が、仲々無常の世の中にて、仲々苦しき事もありて、自分は速に判断しかねて一寸涙を流してありたが、夕景に至りて斯

い、みりと佛参した方が宜しからうと思ふて、一人して御讀經いたした。母上の御うつしを前に立つれば、有りし昔の事思ひ浮べん何とも云ふてみやうがない。現に此のからだがある以上は、母上在まして自分を殊に末子として愛して下さられたのであらう。今晚は自分が斯様に御經をあくれば母上も此所に入らして下さるので、母上と御二人であると思ひながら、又思ひつゞけた。自分は何んだか子供が欲しいと思ふにつけても、母上も又自分を斯く思ふて下さるのであらう。生れおちるより下にもおかずして九才まで蝶々花よとお育て下されたのであらう。今御存命ならば此の大きな身體も御目にかげやう、御相談もいたさう、又御慈愛も受けやうなど、思ひつゞけて、父上の御事、今日のやうに阿彌陀經をすらくよむのも父上様より教へていたよいからだと、心は種々に碎かれまして落涙たゞ落涙。先日來の兄へ對しての事なども誠にすまぬと影ながら懺悔いたします。

樹靜かならんとすれば風止まず。子養はんとすれども親ま

さす  
の例誠に適切に感じ、一層涙はこぼれて何とも云ふて見やうがない程有難く思ふた。實に母上の御命日にあたりて一遍の讀經をいたし、合せて佛様に感謝いたす。又思ひだしては信後には喜ぶがあたり前なり、爾るを喜ばざるは煩惱の所爲なり、併し其喜ばれない中から喜ぶのが本當の喜び、又如來様はお喜び下さるのであるといふ事をさして、一層有がたく思はうて御稱名を稱へたのである。南無阿彌陀佛。々々々。

○五日 何んだか二日計りは余り苦しいと思はないて仕

く思ふは、嗚呼自分は二枚の道理にはさまれた様な氣もちがして大さう苦しかつたのである。前きめた通り實行しようと思ひます。大に勉強して世にも、否、ゆゑしき佛弟子とならんと思はうて、夕景には苦しき中より念佛が稱へられたのである。南無阿彌陀佛々々々。

○三十日 前日は母上の御年回に御法話を願つたのであるが、頂度父上の御命日の退夜にあたりましたのである。此の日は而も日曜でありたから求道學舎に御まいりさしていたゞきましたのである。二人程告白もなされて、其後先生より御親切に御話がありました。要する所信心が肝要の御話なりき。歸宅いたして園員など、御話いたして遊びた。

○卅一日 此日は月末なる爲め種々世間的に心を碎いて、いさゝか心配いたしてありたが、未はいつにもせよ御如來様の御本願を思ひうかぶれば、斯様な心配もうすらいてくる。なぜかくなりて、あるかと云ふと、慈悲より遠ざかりてあるからである。南無阿彌陀佛。々々々。

○六月一日 相變らず此の日は世間的にいさゝか心配してあるので、慈悲より遠ざかりてあるのである。併しとても世にながらふべくもあらぬ身の  
かりの契をいかて結ばん。

常に小供などが欲しいとしきりに思ふが、右の歌を思ひ出して此世の中のみじかき事を思ひうかべて、慈悲を喜ばしていたゞきます。南無阿彌陀佛。々々々。

○二日 母上の御命日なりし爲に先生の所からかへりて園員諸君に讀經を御依頼しやうかとも思はうたが、却て一人て

事にまぎれてあるのて、其中御稱名を稱へると全く邪念が去りて安すゝ往生が樂まれる。この味は法を喜ぶ人てなくてはわからないと思ふ。南無阿彌陀佛。々々々。午後は玉耶會に参らんと思ふのである。

玉耶會もなかゝさかんでありました。五六人も御集りてありました。泉師には白隱禪師の無我になられたお話と、師のお歌とお話し下された。此の日は何んだか氣にくわぬ心もちがしたのである。されども世間的には大變ふざけておもしろくありました。ふざけまはりてかへりましたのよ。

此日はつくづく考ふれば清澤先生の御年回と御祥月といふので、此の夜園では佛前に御禮をなして先生の御製作の御本を園員の讀まれて、大變ありがたくお聴いたしました。自分思ふたのである。自分が斯様に法に熱心になりたも只管清澤先生の御導きと思ふ。而も先生のお住ひあそばせし御跡に住ましていたゞくとは誠に以つての外と、あまり自分勝手の様なお話だが、兎に角に淺からぬ御恩を受けておると深く感謝いたすのであります。南無阿彌陀佛。

○七日 主人は歸園せられるだらうと思はうても一日歸られ無い故に落膽した。

此日廣島の人が訪ふて下された。誠に久々ぶりにておもしろくお話をいたしたのである。彼も長々苦勞しられた人、自分も仲々苦勞をしたと思ふによりて、何だか御話が合つて大變おもしろく、半日計りお話に、餘念がなかつたのである。來る五十年の博覽會迄には屹度出世したいなどい。併し世間的であるけれども兎に角犠牲にならねばならないと思ひます。彼

け家を引きこす爲め、自分は學園の發展をする爲めと思つて、假に約束をいたしたのである。まゝ併し明日も知れぬ命なれば法義相續して、其上は世の有様にまかせて暮す事最も肝要なりと思ふ。併しよく考ふれば斯様な気分になるのも一通りではなかつたのであり、畢竟母上の御恩であると深く感謝いたします。兎に角ふりかへるといふことは仲々人間に於ては高尚の考へと思ふ。南無阿彌陀佛々々々。

○十日 身體の異りたる精か何んとなき氣分も變になりたが、此の日は本郷四丁目などにゆき用をたして歸りたのである。午後になりて中島、芝田兩人で訪ふて下され、そゝろに昔の忍ばれて、何時までも舊友といふものはよいものである。兩人の歸られて後は只自分は現在の境遇をかこちてもはやたえがたくて、涙も袖にかゝる有様。ふと思ひついたは近角先生の御講話に「誓の要は無上佛にならしめんと誓ひたまへるなり」故に無上佛になさしめたる以上は、何も此の世の中の事を好都合にはからつて下さるわけには無いとの御話、思ひ浮べて自分が斯様に悲み苦しむも、つまり世の中をかこつたり。是れ即ち御佛の慈悲より遠ざかりあるからなりと懺悔さして頂き、むら／＼御稱名をとなへさしていたゞいた。此夜身體の悪しき精か、何となく世の中をつらく思ふたのである。全く如來の加被力によりて此世までも好都合にお計以下さるかと思ふと、現當二世の御利益を蒙るとはさても御眞實の有り難き極なりと、南無阿彌陀佛々々々。

○十一日 此の日は前日の苦しみに打續き、種々に煩悶してありたが、併物皆前生故、先生の仰の如く、「先生より定

三 たくほどは風がもてくる落葉かな。 良寛上人  
四 田の草をとつてつゝこむこやし哉。 芭蕉  
五 ふるとしも見えぬ小雨をうけためて

○二十二日 三上氏は吾が主人と親友で入らせられるさうだ。此の方が二三日學園に逗留なさるので何んだかられしくて、喜びて迎えた。何て喜ぶといふに宗教に御熱心に入らせらるゝによりてである。自分もつく／＼思ふ。世の中は全く宗教生活でなければならぬ。世の中の事は人はいざ知らず、自分は宗教を信じないでは一日も生きてゐる事が出来ぬ。此の宗教の空氣なくば一日も生存してゐられぬ。只自分は此の宗教の有がたき御教をによりて今日迄長らへさしていたゞいたのである。嗚呼世の中は苦しみの世の中、何分とも欲界てふ名を以て苦しみだらけ、九て地獄の其まゝをあらはしてある、故に余程苦しむのである。此日三上氏佐々木氏主人の食後御話に、學園の將來の事など、嗚呼思ふに自分は本當に一日も早く學園の隆盛に赴く事をいのりてあります。只々青年學生に對して御信仰に入られる様御導きいたすこそ自分のつとめである。が併し能く考へて見れば實際には左程に參らないので誠に困ります。嗚呼如何にもがくとも善心は得がたし。さすれば只佛様の慈悲にすがるより外は無ないのである。南無阿彌陀佛。

○七月四日 此日日照てありた爲め實は近角先生の御ところへ御伺いたさんと思ひましたが、煩ひ悶えて伺ひたくな

まれる死後をいそがんもかへりておろかにまごひぬるか」との御言葉を出し見れば、氣分は追々と樂になりて、又御稱名が出づるのであります。

○十二日 朝よりは煩悶してゐるので、全く仕方ない人である。心が子供の事のみ迷ふて、只やる瀬なく、子供の事を思ふにつけても佛様は自分が一向に佛名も稱へん前から斯く自分を導いて下されたのであらうと深く感じた。人の親のこゝろはやみにあらねども

子を思ふ道にまよひぬるかな  
全く斯くの如くて心はやるせなく、いよ／＼つらく思ふ次第であります。子供が欲しいと思ふ其の欲しいといふのはいたずらに欲いにはあらず、何んとなき地獄で苦しんで居る人たちを早く人間教界に生れさしてやり度いのが抑々の始めてある。南無阿彌陀佛。々々々。

○十八日 此の日御命日にもかゝはらず御精進もしない。全く不法義もの、全く忘れるとはひどい。つまり心が浮いてるからであらうと思ひます。誠に懺悔に堪えないのである。此夜在の人が御訪ね下されて種々御話を伺つた。自分には適切な御話でありましたから大變喜びました。兎に角要する所は眞宗では信心を以て肝要とす。つまり信仰上よりすれば何事も無いのである。

一 きりむすぶたちのしたこそ地獄にて、  
身をすてゝこそ浮む瀬もあれ。 澤庵禪師  
二 宿かさぬ人のつらさをなさけにて  
おぼろ月夜の花のしたぶし。 蓮月尼

ひて伺ひました。ところが丁度故西川さんの追悼會を催うされたので、近角先生やら荻野さんを始として、其外の方の演説がありました。此日は涙を流して拜聴いたしました。誠に西川さんの御信仰は無論の事、御一生誠に立派なる御生活をなされたる事と、又我が菅瀬家の母上の御病氣と同じく入らせられたる事にて、いよ／＼涙が流れました。自分は深く感謝いたしました。此日は行かうか行くまいかと考へてありたに遂に行かして頂いたと思ふと、偏へに西川さんの御手びきと深く感謝いたしました次第です。南無阿彌陀佛の御禮報謝が引きつゞき口に出しました。

○六日 國元からの友人杉原氏を訪ふた。常に虚榮の盛んなる自分には外出は餘り樂では無いのである。けれども友人との間に別に遠慮も譯もないので、兎に角加賀美氏と遊びにゆきたのである。種々お話をなして楽しくすぎ、歸途ふと感じた。外の事でも無い、自分は常に思ひを満足させんと思ふが併し身分をよく考へなければならぬと自分の現在の境遇を考がふれば、そんなに世間の婦人と同じ様な考をもちてあると、宗教は全くふるはなくなると心から悟りて、大層心が樂になりました。宗教の人に及ぼす力の大なる事に氣がついて、思はず南無阿彌陀佛を稱へたのである。南無阿彌陀佛。

○十九日 不思議な御縁で日本女學校の相撲寄附符を賣り捌くべく命ぜられたので、朝も食事終て先づ早や目に方々をかけ廻はりて、先づ一日で割合によく思ひ通り以上に運びがついたので、全く嬉しかつた。彌々以て佛様の力添えの程を深く感謝いたしました。さなきだに自分は校長に御恩返し

をせんと思つてありたので、全く喜び／＼して、一日は暑さも忘れて歩きまはりたのである。深く四海兄弟に感謝いたします。南無阿彌陀佛。

以下の三通は夫人の往生后九月二十七日衣類整理の際帯上の中より発見せられたるものなり。夫人の往生は九月十一日なり。

四十一年十一月三日

今日は誠に不思議なる哉、今上天皇陛下の御降誕遊ばしたる日に、吾は父上並に兄上より、否如來様より二反五畝の田地を速に頂戴いしたので、ひとへに如來様の御影であります。併是に就ては吾の意の如くはゆかないけれども、大に是所に於て先生より承りたる、物有本末、事有終始、先後所知道に近し」嗚呼有がたい實に有がたい。深く父上に對して感謝いたします。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。全くうれしき爲紀念の爲記しおくなり。④ (この一通は鉛筆で記された)

年は改まりて今日は四十二年二月十六日でございます。思はず吾の日々の日暮しを回顧せば、誠に「ザンギ」に堪えませ

ん。願くば園員諸君よ、吾は決して諸君に對して冷酷なる考をもちては居ない、のみならず却て學園の益々發展せらるゝ事を日夜に希望いたして居る次第なり。上に鉛筆にて記しお

くところの金子は、將來學園發展の法々都合により、金子必要の時御遣ひ下され度く、ひたすら御願いたします。併し今其金子の廻り次第により、何程に相なるかは知らねども兎に角此父上より頂戴の田地丈は吾考ありて斯く貯蓄いたしたるなり。宜しく園員諸君に御依頼いたします。此日恰も十六日親鸞聖人の御命日、現在園員なる橋超妙、佐々木慶成氏、吾主人、三人連れにて麻布善福寺に參詣いたされた留守、吾は主人の室にいりて恭しくかき記した次第でございます。

南無阿彌陀佛 南無阿彌陀佛 ④

明治四十二年四月二日母上の命日誌

死して後の遺言とす

菅瀬たゞ子 ④

私は生れは廣島縣豊田村字和木と云ふ四方山もてかこまれたる小村に生れたるものにして、専徳寺と云ふ小寺の前住職渡邊流情と云ふ人の長女にして、兄弟は僅に二人なりき。幼き時より二人の子供なりし爲非常に愛せられて日暮しいたしぬたるところ、不幸にして九歳の夏母上は黄泉の客ともむかれた。夫故家内中の悲みはいはん方なくさみしく日暮しい

たしかりたり。それよりは父上の手にて十四五歳迄そだてられてゐた。其内早や小學校だけは卒業いたす事となりたが、其れより幸にして女學校にも入學をゆるされた。吾の長年の望も達せられて一生懸命勉強してありた。然るところ菅瀬母上につれられ東上する事となり、東京までまゐり又日本女學校とて切通の學校にも入學させられた、自分の喜びは一方ではなかつたのである。其内早や光陰も矢の如くいつしか女學校も卒業の時節も來りた。此れ吾が信仰に入るべき芽の出づる初めなり。

全體此女學校の校長は女子の教育に熱心なる御方にして、在校の時は倫理の時間に種々の御話を伺つたので、抑信仰に入るべき緒は校長の常の御話なる親の子に對する事なり。例へば「親なる者に子供は愛を求めざるが然るに親は深く愛するなり」との御話、如何にも左様なりと吾は伺つた。右の如く「衆生は佛に愛を求めざれども佛は常に衆生を愛し給ふ」との事柄よくわかつてきた。斯く相成ると自分は一人悟りたる如く、又はいまだ氣にかゝる如くもありてすぐる事半年の餘なりき。

時は明治三十八年の事なりき。吾れ同和學園の世話をなし初めたる年なりき。それより日をすぎざりて三十九年の歳暮となりぬ。時に學園には年末信仰談話會をひらくべく設けられた。其時は相變らず信仰の御話、安心立命する爲にはキリスト或は佛敎にても、兎に角安心立命の立場までゆけば宜しいとの御話ふすま越に伺つた。一層自分の心には安心いたしたかの感をいだいたのである。それよりは妙に講話など伺ひた

くなりて求道學舎にまゐりたのである。先生の御話を伺つたら、どうも是迄の安心は余り氣分が樂すぎてあるから種々先生にたづねたら、果して是迄の安心は違つてゐたのである。子供が親にたのまずしておれば、子供は或は氣まゝに流れるかわからぬとの御話、それよりつゞいて日曜講話を伺つた。追々喜びも湧き出て、念佛も稱へてありたが、併また元になかへりたのである。調度四十年迄はうさきたる心でありたが、四十年初島田先生の御許に伺ふよゝになりてよりは、左の御言葉をもつて元の喜びを引きおこしたのである。

物有本末。事有終始。知所先後近道。

トルストイ先生の御話も深く感じたるなり。

山は山道は昔に變らねど變はりはてたる吾が心かな。一時は同和學園の成功をいのりつゝありしが、此頃は斯くの如き心は起らずして、却て只々青年の人に對して法をきかせいては佛にすまないと感あるのみ。利井伯母の手紙の中の御文も有難く、下田先生の御話も常に思ひ居れり。『新公論』の社會の最貧民の御話も現に一生實行いたす積なり。左の歌勿體なや祖師は紙子の九十年

嗚呼何つも喜ばしていたゞくは、

そらごとたはごと誠あることなし

の御文。

阿彌陀佛こゝを去る事遠からず

併し時々煩悶にまなごさへられども、御影にて佛の御慈悲にたちかへらして、

南無阿彌陀佛、々々々、々々々、と有難く御禮申上げます。

吾が少しの貯金あり、何卒よろしく御願申上ます。

菅瀬芳英様 (拾圓) 日本女學校 (拾圓)

求道學舎 (拾圓) 同和學園 (拾圓) 皆様より御先に一步御先に 南無阿彌陀佛々々々。

時報

山形行

山形市七日町願重寺原宙一氏は數年來同寺に於て教日問有縁の御同朋の爲に傳道せんことを望まれ、同氏の兄上會津求道會の主腦たる原卓一氏より切なる懇望を受けること歳久しかりしが、幸にも機縁純熟して山形行の恩寵を得るに至れり、十一月廿一日夜汽車を以て東京を出立し、二十二日朝到着し、爾來二十六日に至る五日間午前午後各二席法縁を得たり、恰も御正忌報恩講に該當するを以て、佛前殊に莊嚴麗はしく、聖人影向の梵苑に於て殊に聖人九十年の御苦勞を慶讚し奉る、總序の御文、歎異鈔の御述懷反覆讀仰し奉りて、つくづく聖人の御自督を仰き奉る、岡田彌作及姉君、會田重次郎、菅氏兄弟、原田中庸、阿部孫七、本澤夫人、堤鳳麟諸氏の御同朋と會して信心を喜び、特に原宙一氏及父君精一氏と朝夕常に大

慈を仰ぎ、同行諸氏は徹頭徹尾一席をも缺けずして深く如來の恩徳を感謝せらる、又毎夜在家に招待せられて亦法縁を結ぶ、第一夜は吉田庄兵衛第二夜は九谷長谷川第三夜は丸山長谷川第四夜は福島治助第五夜は出立歸京の途につき車中大悲の御恩に感謝し奉る。

求道學舎報恩講

十一月廿八日は恰も日曜日たりしを以て講話及信仰談話會ありしが近時稀なる多數の來聽者ありし、午後學舎列年の如く報恩講定日たりしを以て五時來集、先づ晚餐を共にし共に佛間に於て嚴かなる勤行を爲し、御傳鈔を拜讀し、法話を爲し茶話會を開き、信念を披瀝し、和氣洋洋夜半に至りて散會す。萩野丸茂諸氏の來賓を初め學舎出身在京者皆會し融々慈光の中に念佛勤行し奉る。

東京諸會合

十月二十五日は大森八景園に於て善友婦人會一周年大會あり、十一月九日横濱高島屋吳服店に於て店員の講話を爲す、同十日横濱梅ヶ枝町知院に於て傳燈式一周年紀念演說會に出席す。



前代未聞の珍書出版

皆往院頓慧講師述 ●眞宗學師 小栗栖香頂師校閱



教行信證眞化六卷は淨土眞宗の本典なり、然れば同宗教義の組織、絶待他力の深旨、三經の取扱、極樂の立證、肉食妻帯の宗風等、總て收めて本典中にあり、凡そ淨土眞宗を知らむる欲する者は老幼男女悉く本典に據らざるべからず、況や眞宗幾十萬の僧侶及信者諸士に於てをや、弊館義に眞宗學界の泰斗たる香月院講師、並に皆往院講師の遺稿を得て、本典前四卷の講義を刊行せり、今亦四方要求の聲に應じ皆往院講師の遺稿に嚴密なる校訂を加へて、眞化兩卷の講義を發行す、希くは他力念佛を信する者も、疑ふ者も、俱に此天下の珍品を座右に備へ、或は他力教研究の資料とし、或は安心立命の指針とせられんことを、尙ほ望むらくは本書は一千七百餘頁の大冊なれば豫約申込部數外に印刷せざれば即時即刻豫約締結せられんことを、(見本御入用の方は二錢切手封入申込あれ)

本書の定價は金六圓五拾錢にして、特別減價豫約方法は左の二種とす

甲種 金四圓五拾錢 小包料貳拾錢 豫約申込の際全額拂込む者に限る

乙種 金五圓 小包料貳拾錢 最初申込の際證據金壹圓殘額四圓と小包料金貳拾錢は明治四

申込期限十二月二十日限り完成期日明治四十三年三月十日御申込順に發送す

眞教行信證講義

香月院深勵講師講述 皆往院頓慧師講述 小栗栖香頂師校閱

再 和裝十冊定價金八圓五拾錢 版 二 映 入 小包料金參拾五錢

# 懺悔錄附錄「歎異鈔」

第五版 定價 廿錢  
 郵稅 四錢  
 袖珍美本

本書は著者が實驗の信味に基づき、右來求道者の金科玉條たる「歎異鈔」の眞髓、惡人救濟の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものにして、著者は先づ自己の經驗に筆を起し、半歳以上胸中に蓄積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と、最後に佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇頓に一掃せる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舍城の悲劇に照し、又著者が實驗を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人と雖も如來慈光の下唯一救濟の一道ある所以を叮嚀懇切に詳述したり。蓋し之れ「懺悔錄」の名ある所以にして發行以來本書を縁として入信の士に乏しからざるは吾人の私に感謝措く能はざる所。而して今回第五版を發行するに及び、紙質製本等更に充分の改良を施せり。求道者諸君の必讀を冀ふ。

# 親鸞聖人の信仰

初版 定價 七十錢  
 小包料 八錢  
 クロース綴

親鸞聖人の「教行信證」が聖入一代の信仰經驗の結晶にして、他力信仰界唯一の寶典たる事は既に諸君の知了せらるゝ所、著者入信以來此の寶典を以て自己が信仰の生命となし、日夕拜繙熟讀せる事既に多年、或は之を各地の講習會に講じ、或は求道學舍來訪の諸君と語り、殆んど日として其の化を蒙らざる事無し。而して其實驗感佩の餘録を編述して茲に初めて世に公にしたる者を本書となす。固より聖人の偉大なる信仰は本書の能く盡す所にあらずと雖も、又以て讀者が聖人の信仰に接し給ふの一階梯たるに足らんか。是れ實に著書が至願とせる處なり。聖人の信仰に隨喜せらるゝ諸君の必讀を請ふ。

東振京市本郷區川町一丁目番地 求道發行所 申込所

## 近角常觀著作書目

### 近角常觀著

# 人生と信仰

- |             |             |
|-------------|-------------|
| 第一章 人生問題と信仰 | 第二章 悲觀思想と信仰 |
| 第三章 倫理力行と信仰 | 第四章 犯罪心理と信仰 |
| 第五章 社會問題と信仰 | 第六章 國家秩序と信仰 |
| 第七章 世界宇宙と信仰 |             |

最新刊 定價 卅錢  
 郵稅 四錢  
 袖珍美本

東振京市本郷區川町一丁目番地 求道發行所 發賣所

本書は一昨年雜誌「求道」秋季號として發行したるもの、近時四方同胞諸氏の需要益々急切なる爲め、再び一冊として茲に發刊したるものなり。蓋し現代思想界の亂調は律法的教訓、若くは物質的施設を以て根治する事難かるべし。獨り信仰により根本的に自覺して、初めて解脱せる眞人生に入る事を得ん。是れ本書を發行する所以也。

東振京市本郷區川町一丁目番地 求道發行所 發行店

# 冠頭唯信鈔文意鈔

初版 定價七錢  
部數ニ應  
充分割  
引ス  
郵税三冊迄貳錢  
施本用小册子

右唯信鈔は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、唯信鈔文意は本書を弘く世に行はしめんが爲め、聖人特に文意を著して、愚癡無智の輩に授け給へるものとす。聖人に文意の著あるに見ても唯信鈔の他力信仰上必須の聖典たるは知る事を得べし。「救異鈔」を初めとして聖人一代の化導、多く此書に淵源すと言ふも過言に非るなり。爾るに世久しく此の聖典を忘る。茲に本所感ずる所ありて、此の兩書を一冊にまとめて對稱拜讀に便ならしめて刊行す。校正を嚴密にし、冠頭を加へて参照用文を引用したる等凡て救異鈔に同じ。同胞諸君には是非に一讀を冀ひ奉る。  
(右久しく發行相遅れ居候處今回漸く其運びに相成り候に付代金既送の諸君には製本出來次第御送本可申上候也)

# 冠頭歎異鈔

第四版 定價五錢  
部數ニ應  
充分割  
引ス  
郵税四冊迄貳錢  
施本用小册子

此の「歎異鈔」は聖人の遺教を世に普からしめんが爲め、施本用小册子として出版せしものにて、讀み易きやう字をまばらに植ゑ、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より参照すべき文を引用し、親切に作りたるものなり。教家諸君の御一顧を俟つ。(右又品切中の處今回其第四版を發行仕り候につき左様御諒承願上候)

# 信仰之餘瀝要畧

初版 定價五錢  
部數ニ應  
充分割  
引ス  
郵税四冊迄貳錢  
施本用小册子

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に「信仰之餘瀝」中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を抜萃し、傳道用小册子として印刷したるものなり。有志諸君の御試用を切望す。

# 道光

一部六錢 税五厘  
十部税共 五十錢  
毎月二十五日發行

第二年第八號目次

- 信ぜらるゝ人より信ずる人がありがたいたふとい
- 少女の死により自己の信樂を告白す
- 道友のもとに
- この機このまゝこの機のなりて
- 信界の消息
- 「慈光」に就いて
- 道友の書翰
- 日曜學校に就て
- 和歌―白愁―よろこび

# 冠註安心決定鈔

一部税とも 七錢  
但二冊迄税 貳錢

思ふに歎異鈔は親鸞聖人の信仰の肝腑にして安心決定鈔は蓮如上人の信仰の眞髓なり。しからば求道の士絶對他力の堂奥に參ぜんとせば二鈔を前後して拜誦すべきなり

京都府紀伊郡柳原町愚禿房内

發行所

京都求道會

大賣捌所

東京市神田區表神保町

東

京

堂

## 規定

- 本誌は毎月一回一日發行とす
- 本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、但し其節には登記料金貳錢必ず御加算を請ふ
- 郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
- 郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
- 本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
- 回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵税一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘
● 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢				

明治四十二年十一月十二日印刷  
明治四十二年十一月十五日發行

發行兼編輯人 近角常觀  
印刷人 白土幸力  
東京市本郷區森川町一番地  
求道發行所  
(振替口座東京一六六九六番)

東京市神田區表神保町

東

京

堂



前號要目

求道

◎慈悲の父母

自贊

◎御慈悲にたちかへる

講話

◎長生不死の神方

聖傳

近角常觀

◎デヤータカ釋尊傳

第三十三 賢き鳥と馬鹿者の話

第三十四 鶴と猿と象の話

告白

◎故菅瀬夫人の日記

時報

◎關西の旅◎太子詣で

求道第六卷第十號 明治四十年十一月十二日第三種郵便物認可 明治四十二年十一月十五日發行 (毎月一回十五日發行)

東京市神田區英土代町二丁目三番地